
【イナイレ】 山で——1話

香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【イナイレ】山で——1話

【Nコード】

N3546Q

【作者名】

香夜

【あらすじ】

FFIのメンバーが山に泊まり掛けで息抜きor特訓をしに行きます。

朝から集合したみんなは山の別荘に向けて歩き始めます…が、途中でヒロトと円堂が居なくなり更に天気も崩れて大変な事になってしまいます；

少女漫画のような展開でラブラブになっていくヒロトと円堂の…話…かも（）

他にも話の中で私好みのCPを書いていますっ。

イナイレ ヒロ円（前書き）

◎ヒロ円です

◎過度な期待はしないでくださいっ（駄作品なので；）

◎話：何話か続きますっ！

イナイレ ヒロ円

！注意！

◎B L要素を含みます。

◎きっとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（F F Iのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一気にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なァッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていたが、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウッシッシ」「私もですっ！」（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら俺も賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うわ。「います。」

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉し
（（

イナイレ ヒロ円（後書き）

中途半田なところで一話終了してしまい、本当に申し訳ないです。

（誰も見てねえから大丈夫だ↑

小説投稿は割りと早めにできるかと思えます；

実は：初投稿なんですっ！：誤字があっても話が面白くなくてもごちやごちやでも：多目に見てやって下さ（ry

【イナイレ】山で——2話（前書き）

前作、“【イナイレ】山で——1”の続きです。

投稿すげえ遅いですが、今回も見下さるとタヒにまs（

今回の内容は、回想を終えて休憩所に行く皆を書きましたww

、中学生でそれはねえだろ、とか、ネーヨ（笑）、となるかと思

います…がっ！そこは超次元なのでッ！（

【イナイレ】山で——2話

！注意！

◎B L要素を含みます。

◎きつとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（F F Iのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一氣にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なァッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていたが、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウッシッシ「私もですっ！（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら俺も賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うわ。「います。

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉しい」

風丸「ん……？ 特訓なのか？……まあそれはともかく、円堂。細かい日程はどうするんだ？ あと集合場所とか集合時間とかどこに泊まる……」

だとか…決めたのか？」

円堂「えっと…ま、ままだ…：決めてない…思いつきで言ったから…；」円堂はしょんぼりした顔で風丸を見た。

風丸「…：。まったく…相変わらずだな、円堂は」

鬼道「円堂、泊まる所と言えば山に鬼道家の別荘があるぞ…？」

輝く円堂の瞳。

風丸「計画なら俺に任せてくれ^^」

潤む円堂の瞳。

木野「道のりや案内は私たちがするわ！」

円堂は耐えきれなく、とうとう泣き出した。

円堂「あ、ありがとうっ皆っ！うう／／／」

すると会話に入ってこなかったヒロトが急に接近してきた…円堂に…。

基山「ハアハア／／／え、ええ円堂君…ッ！！色々ヤバイねッ／／ハアハア／／／」

こんなヒロトの変態ぶりに全く引かない円堂は天然or鈍感の域を越えてしまっているのかもしれない。

円堂「そうか？…とりあえず、集合時間だけでも決めようぜ」

皆が頷くと鬼道が移動時間を教えてくれた。

鬼道「○×バス停から徒歩で3日だそうだ。…勿論片道でな？」

円堂以外の皆の表情が固まっていく。

円堂「これも特訓だなッ！？よしッ！行こうぜッ！」

全員で全身全霊を込めて否定した。すると円堂は誰にも敵わない必殺技を出す。

円堂「だ…ダメ…かなあ？」目を潤ませて上目遣い気味に皆を見渡す。

基山「良いに決まってるじゃないかっ！！ハアハア／／／」

まずヒロトが反応する。

そして次々に円堂LOVEの面々が反応していく。

豪炎寺「俺も…行く／／／」いつもクールな豪炎寺だが今はもう円

堂に釘付けた。

鬼道「絶対行く何が何でも俺は円堂と行く行く。」

鬼道は壊れたようだった。多分ヒロト（普段）並にビッチスイッチが押されているだろう。

木野「「勿論行くわよ／＼／」

ふゆっぺ「私も行きます／＼／／」

音無「じゃあ私も行きますねっ」

一年生ズ「行く「ッス「よ「でやんす「行きます」

佐久間「鬼道が行くなら／＼／」

飛鷹「キャプテンがry（「と、言うように円堂のしたいことが次々に決まっていた。

（決まったことは下記に箇条書きにして書きました）

・集合時間…AM5時00分

・集合場所…稲妻山（私の勝手な妄想の山です↑）のバス停

・持ち物…必需品・お茶（大量）・生活用品…等

・宿泊所…鬼道の別荘

・バス停↓休憩所（1日過ごす）↓休憩所2（1日過ごす）↓休憩

所3（1日過ごす）↓（目印…銅像の様な墓）鬼道の別荘（三泊4

日）↓休憩所3から順に来た道に戻る（3日）↓バス停↓雷門で解散

・注意…長旅になるので準備はきちんとしておきましょう。また、

監督や保護者が来ないので自分の身は自分で守るようにしましょう。

（終わりです。ついでに回想も終わりです、長々と回想をいれてサ
ーセンでした；）

そして現在に至る。

風丸「取り敢えず円堂が落ち着いたら出発しようぜ。木野、まずは
休憩所までの地図を見せてくれ」

木野「うん…えーと、ここを右に曲がって…真っ直ぐ行って…ずつと歩いて看板が見えてきたら休憩所に着くみたいだよ」

木野さんが風丸君に説明していると円堂君が回復し始めた。

円堂「…ッふううううう…!!!」

風丸「…ま、円堂には完全に回復してもらいたいし…出席でもとるか…」

すると冬花さんが手際よく一枚の紙を手渡す。

冬花「はい、そう言うと思って昨日木野さんと出席簿を作ったんです。良かったら使ってください。」

風丸「おお…ありがとうございます。…じゃあ…」

風丸君は次々に皆の名前を呼び始めた。

そして呼ばれている間、円堂君は何故か俺に近づいて来る。

基山「？」

円堂「ヒロトお…眠たい…」

基山「!!!!!!」

びっくりした…。そして思わず円堂君の方に伸ばしていた手をみて更に驚く。

円堂「…? ヒロ「円堂おッ!!」

俺が襲いかけたのを間一髪で風丸君が間に入ってきた。

風丸「ふう…あ、えと…もう出発するぞ」

円堂「おうっ!!」

歩き始めて約2時間が経った。それまで五月蠅いくらいに喋りまくっていた皆にも疲れが見えてくる。そう言う俺も坂道ばっかの道に疲れてきた。

壁山「つ、疲れてきたッス…栗松、木暮君…降りて欲しいッス」

栗松「分かったでヤンス…うう…。」

木暮「ええー役に立たないなあーこのデカブツっ！ウッシッシ」

音無「木暮君ッ！文句言うなら帰りなさいっ！！」

このようにいつもの展開が始まっては静まり…と言う繰り返しが度々展開されている。円堂「ん…？秋、あの建物じゃないのか？休憩所って…」

円堂君がそう言ったのはだいぶ時間が経った頃で、時計を見ると軽く7時間が経過していた。勿論休憩所に着くまでに何回か休憩はしたのだが皆の体力は限界寸前のようなのだ。

木野「え？…あ、そうよ。…ほら、ちょうど看板が見えてきたし。」

木野さんが指を指した先には小さな看板が建っている。

吹雪「やっ休憩所に着いたんだね…」

鬼道「そうだな…」

壁山「そろそろお昼ご飯の時間ッス…」

綱海「山登りを軽く見てたぜ…」

休憩所が目に見えてきた余裕か、皆の口数が増えてきた。

（又、中途半田でサーセンです；次話はこれを投稿した後直ぐに書くかと思っているので早めに投稿出来ると思います（↑殴）

【イナイレ】山で——2話（後書き）

本文中にも書いた通り、また中途半田で終わらせてサーセンですッ
！！

そして次話は投稿後直ぐに書きたいと思っておりますので…KSく
て肝い作品ですが目を通して戴けたらな…と思います。

それから、読んでくださって本当にマジで感謝ですッ！！

【イナイレ】山で——3話（前書き）

BL要素が増えてきています。もしかしたらR—15いく話が出て
しまいそうで心配です；

この作品を読んでいただけたら嬉しいです。

【イナイレ】山で——3話

！注意！

◎B L要素を含みます。

◎きつとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（F F Iのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一気にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なァッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていたが、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウッシッシ「私もですっ！（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら俺も賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うわ。「います。

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉しい（（

風丸「ん……？ 特訓なのか？……まあそれはともかく、円堂。細かい日程はどうするんだ？ あと集合場所とか集合時間とかどこに泊まる……

だとか…決めたのか？」

円堂「えっと…ま、ままだ…：決めてない…思いつきで言ったから…；」円堂はしょんぼりした顔で風丸を見た。

風丸「…：。まったく…相変わらずだな、円堂は」

鬼道「円堂、泊まる所と言えば山に鬼道家の別荘があるぞ…？」

輝く円堂の瞳。

風丸「計画なら俺に任せてくれ^^」

潤む円堂の瞳。

木野「道のりや案内は私たちがするわ！」

円堂は耐えきれなく、とうとう泣き出した。

円堂「あ、ありがとうっ皆っ！うう／／／」

すると会話に入ってこなかったヒロトが急に接近してきた…円堂に…。

基山「ハアハア／／／え、ええ円堂君…ッ！！色々ヤバイねッ／／ハアハア／／／」

こんなヒロトの変態ぶりに全く引かない円堂は天然or鈍感の域を越えてしまっているのかもしれない。

円堂「そうか？…とりあえず、集合時間だけでも決めようぜ」

皆が頷くと鬼道が移動時間を教えてくれた。

鬼道「○×バス停から徒歩で3日だそうだ。…勿論片道でな？」

円堂以外の皆の表情が固まっていく。

円堂「これも特訓だなッ！？よしッ！行こうぜッ！」

全員で全身全霊を込めて否定した。すると円堂は誰にも敵わない必殺技を出す。

円堂「だ…ダメ…かなあ？」目を潤ませて上目遣い気味に皆を見渡す。

基山「良いに決まってるじゃないかっ！！ハアハア／／／」

まずヒロトが反応する。

そして次々に円堂LOVEの面々が反応していく。

豪炎寺「俺も…行く／／／」いつもクールな豪炎寺だが今はもう円

堂に釘付けだ。

鬼道「絶対行く何が何でも俺は円堂と行く行く。」

鬼道は壊れたようだった。多分ヒロト（普段）並にビッチスイッチが押されているだろう。

木野「「勿論行くわよ／＼／」

ふゆっぺ「私も行きます／＼／／」

音無「じゃあ私も行きますねっ」

一年生ズ「行く「ッス「よ「でやんす「行きます」

佐久間「鬼道が行くなら／＼／」

飛鷹「キャプテンがry（「と、言うように円堂のしたいことが次々に決まっていた。

（決まったことは下記に箇条書きにして書きました）

・集合時間…AM5時00分

・集合場所…稲妻山（私の勝手な妄想の山です↑）のバス停

・持ち物…必需品・お茶（大量）・生活用品…等

・宿泊所…鬼道の別荘

・バス停↓休憩所（1日過ごす）↓休憩所2（1日過ごす）↓休憩

所3（1日過ごす）↓（目印…銅像の様な墓）鬼道の別荘（三泊4

日）↓休憩所3から順に来た道に戻る（3日）↓バス停↓雷門で解散

・注意…長旅になるので準備はきちんとしておきましょう。また、

監督や保護者が来ないので自分の身は自分で守るようにしましょう。

（終わりです。ついでに回想も終わりです、長々と回想をいれてサ
ーセンでした；）

そして現在に至る。

風丸「取り敢えず円堂が落ち着いたら出発しようぜ。木野、まずは
休憩所までの地図を見せてくれ」

木野「うん…えーと、ここを右に曲がって…真っ直ぐ行って…ずつと歩いて看板が見えてきたら休憩所に着くみたいだよ」

木野さんが風丸君に説明していると円堂君が回復し始めた。

円堂「…ッふううううう…!!!」

風丸「…ま、円堂には完全に回復してもらいたいし…出席でもとるか…」

すると冬花さんが手際よく一枚の紙を手渡す。

冬花「はい、そう言うと思って昨日木野さんと出席簿を作ったんです。良かったら使ってください。」

風丸「おお…ありがとうございます。…じゃあ…」

風丸君は次々に皆の名前を呼び始めた。

そして呼ばれている間、円堂君は何故か俺に近づいて来る。

基山「？」

円堂「ヒロトお…眠たい…」

基山「!!!!!!」

びっくりした…。そして思わず円堂君の方に伸ばしていた手をみて更に驚く。

円堂「…? ヒロ「円堂おッ!!」

俺が襲いかけたのを間一髪で風丸君が間に入ってきた。

風丸「ふう…あ、えと…もう出発するぞ」

円堂「おうっ!!」

歩き始めて約2時間が経った。それまで五月蠅いくらいに喋りまくっていた皆にも疲れが見えてくる。そう言う俺も坂道ばっかの道に疲れてきた。

壁山「つ、疲れてきたッス…栗松、木暮君…降りて欲しいッス」

栗松「分かったでヤンス…うう…。」

木暮「ええー役に立たないなあーこのデカブツっ！ウッシッシ」
音無「木暮君ッ！文句言うなら帰りなさいっ！！」

このようにいつもの展開が始まっては静まり…と言う繰り返しが度々展開されている。円堂「ん…？秋、あの建物じゃないのか？休憩所って…」

円堂君がそう言ったのはだいぶ時間が経った頃で、時計を見ると軽く7時間が経過していた。勿論休憩所に着くまでに何回か休憩はしたのだが皆の体力は限界寸前のようなのだ。

木野「え？…あ、そうよ。…ほら、ちょうど看板が見えてきたし。」
木野さんが指を指した先には小さな看板が建っている。
吹雪「やっ！と休憩所に着いたんだね…」

鬼道「そうだな…」

壁山「そろそろお昼ご飯の時間ッス…」

綱海「山登りを軽く見てたぜ…」

休憩所が目に見えてきた余裕か、皆の口数が増えてきた。

（又、中途半田でサーセンです；次話はこれを投稿した後直ぐに書くかと思っているので早めに投稿出来ると思います（↑殴）
（コピーして次話投稿してます；）

円堂「おお！！入り口だあっ！」

それまでくたくただった皆はその言葉で一気にペースを上げた。

不動「やっとかよ…」

立向居「そうですねっ！本当にやっ！とですよね」

虎丸「疲れたー」

豪炎寺「ふっ…まだ道のりは沢山あるぞ」

扉を開けるとそこは外側と違う古びた場所だった。

壁山「うわっ…！こ、ここ…本当に休憩所っすかぁ？…なんか怖いっす」

木野「え、ええ…そのはず何だけど…酷い所ね」

成る程そこは誰も想像がつかなかった光景が広がっていた。

まず暗い。今日は真夏の真っ昼間、なのに天井の穴から出てくるか細い光しか辺りを照らすものはなかった。

円堂「前が見えな…いッ！」（どんっ

基山「ええええ、円堂君ッ!？」

先ほどからゆっくり動いていた円堂君が俺にぶつかる。

円堂「ヒロト?…あ、ごめんッ!大丈夫か?!」

基山「うん、全然平気だよ^^」

それよりも円堂君の顔が近い。しかも本気で心配してくれているから余計GOODきている。

全員が休憩所に入った頃、急に天気が崩れだした。

吹雪「山の天気は変わりやすいって言うしね」

音無「ですねー、ってッ!天井の穴から雨が…!」

立向居「わ、わわわっ冷たっ!

綱海「大丈夫か?立向居…ほら、こうすればお前にかからないだろ

?」（がばっと、立向居に覆い被さる綱海。

立向居「っ、つつつ綱海さんっ!!!／／／」

基山「……!」

さりげなく俺は円堂君に目をやる。

円堂「うおおうっ!冷てえー」

基山「……!!!!!!」

来た…俺の…俺の時代が…き、た、…ッ!（ビッチ

基山「円堂く…!ぐおおえんじい君ッッッッッッッッ!」

見れば豪炎寺…いや豪園児君は綱立同様に円堂君に覆い被さっていた。

豪炎寺「ふっ……」（どやっ

基山「……ッ!!!!」

円堂「ヒロト、何か俺の事呼んだか?」

基山「え…いや、何でもないよぉー^^」
こういう風に昼と夕方を皆で過ごした。

P M…23時16分

急に円堂君がムクリと起き上がり、布団を抜け出していった。
基山「…？」

他の皆は今日の疲れかぐっすり眠っている。

ちなみに布団は古びた和室の中に（女子は別室）布団を敷き詰めて
皆で寝ている。

俺は円堂君の行方を知りたかったので後をつけた。

どうやらトイレに行きたかったらしい。円堂君は小走り気味にトイレに続く長めの廊下を歩いていた。

そして円堂君がトイレに入ってから1分ぐらいが経ったとき、空が
ピカッと光る。「きゃあああああッ！！！！！！」

円堂君が入ったトイレから聞こえた悲鳴。

俺は咄嗟にドアをノックしまくっていた。

すると中から泣きそうな顔をした円堂君が飛び出してくる。

基山「ええ円堂君ッ！！！！！！／／／」

円堂「ヒロトおううっ！こ、怖い」

（3話終わりです；中途半田は香夜恒例の行事ですねWW2話投稿
してから書いてきたのに何このペースの遅さor駄作品さ：orz
申し訳ないです。）

【イナイレ】山で——3話（後書き）

投稿亀ですね；

最近円ヒロや吹染にも興味がありますww（何

誰かと語りたい：（↑

→調子乗りました；すみませんっ！

良ければ良いので次の4話を投稿したときに目を通してやって下

さい；

閲覧ありがとうございました。

【イナイレ】山で——4話（前書き）

かなりヒロ円ってます。

よくありそうで無いようなベタな感じになってきました（どっち
すぐく俺得な話ですw w

文中に綱立をよく書いていますよねw：大好きなCPなんですw w
あと：土方、日本代表なのに描写してませんねっ！あと染岡も；
他に忘れた日本代表メンバーが無いかすっごく心配です。

また、この作品を見てくださると嬉しいです（）

【イナイレ】山で——4話

！注意！

◎B L要素を含みます。

◎きっとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（F F Iのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一気にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なァッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていたが、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウッシッシ「私もですっ！（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら俺も賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うわ。「います。

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉しい」

風丸「ん……？ 特訓なのか？……まあそれはともかく、円堂。細かい日程はどうするんだ？ あと集合場所とか集合時間とかどこに泊まる……」

だとか…決めたのか？」

円堂「えっと…ま、ままだ…：決めてない…思いつきで言ったから…；」円堂はしょんぼりした顔で風丸を見た。

風丸「…：。まったく…相変わらずだな、円堂は」

鬼道「円堂、泊まる所と言えば山に鬼道家の別荘があるぞ…？」

輝く円堂の瞳。

風丸「計画なら俺に任せてくれ^^」

潤む円堂の瞳。

木野「道のりや案内は私たちがするわ！」

円堂は耐えきれなく、とうとう泣き出した。

円堂「あ、ありがとうっ皆っ！うう／／／」

すると会話に入ってこなかったヒロトが急に接近してきた…円堂に…。

基山「ハアハア／／／え、ええ円堂君…ッ！！色々ヤバイねッ／／ハアハア／／／」

こんなヒロトの変態ぶりに全く引かない円堂は天然or鈍感の域を越えてしまっているのかもしれない。

円堂「そうか？…とりあえず、集合時間だけでも決めとこうぜ」

皆が頷くと鬼道が移動時間を教えてくれた。

鬼道「○×バス停から徒歩で3日だそうだ。…勿論片道でな？」

円堂以外の皆の表情が固まっていく。

円堂「これも特訓だなッ！？よしッ！行こうぜッ！」

全員で全身全霊を込めて否定した。すると円堂は誰にも敵わない必殺技を出す。

円堂「だ…ダメ…かなあ？」目を潤ませて上目遣い気味に皆を見渡す。

基山「良いに決まってるじゃないかっ！！ハアハア／／／」

まずヒロトが反応する。

そして次々に円堂LOVEの面々が反応していく。

豪炎寺「俺も…行く／／／」いつもクールな豪炎寺だが今はもう円

堂に釘付けた。

鬼道「絶対行く何が何でも俺は円堂と行く行く。」

鬼道は壊れたようだった。多分ヒロト（普段）並にビッチスイッチが押されているだろう。

木野「「勿論行くわよ／＼／」

ふゆっぺ「私も行きます／＼／／」

音無「じゃあ私も行きますねっ」

一年生ズ「行く「ッス「よ「でやんす「行きます」

佐久間「鬼道が行くなら／＼／」

飛鷹「キャプテンがry（「と、言うように円堂のしたいことが次々に決まっていた。

（決まったことは下記に箇条書きにして書きました）

・集合時間…AM5時00分

・集合場所…稲妻山（私の勝手な妄想の山です↑）のバス停

・持ち物…必需品・お茶（大量）・生活用品…等

・宿泊所…鬼道の別荘

・バス停↓休憩所（1日過ごす）↓休憩所2（1日過ごす）↓休憩

所3（1日過ごす）↓（目印…銅像の様な墓）鬼道の別荘（三泊4

日）↓休憩所3から順に来た道に戻る（3日）↓バス停↓雷門で解散

・注意…長旅になるので準備はきちんとしておきましょう。また、

監督や保護者が来ないので自分の身は自分で守るようにしましょう。

（終わりです。ついでに回想も終わりです、長々と回想をいれてサ
ーセンでした；）

そして現在に至る。

風丸「取り敢えず円堂が落ち着いたら出発しようぜ。木野、まずは
休憩所までの地図を見せてくれ」

木野「うん…えーと、ここを右に曲がって…真っ直ぐ行って…ずつと歩いて看板が見えてきたら休憩所に着くみたいだよ」

木野さんが風丸君に説明していると円堂君が回復し始めた。

円堂「…ッふううううう…!!!」

風丸「…ま、円堂には完全に回復してもらいたいし…出席でもとるか…」

すると冬花さんが手際よく一枚の紙を手渡す。

冬花「はい、そう言うと思って昨日木野さんと出席簿を作ったんです。良かったら使ってください。」

風丸「おお…ありがとうございます。…じゃあ…」

風丸君は次々に皆の名前を呼び始めた。

そして呼ばれている間、円堂君は何故か俺に近づいて来る。

基山「？」

円堂「ヒロトお…眠たい…」

基山「!!!!!!」

びっくりした…。そして思わず円堂君の方に伸ばしていた手をみて更に驚く。

円堂「…? ヒロ「円堂おッ!!」

俺が襲いかけたのを間一髪で風丸君が間に入ってきた。

風丸「ふう…あ、えと…もう出発するぞ」

円堂「おうっ!!」

歩き始めて約2時間が経った。それまで五月蠅いくらいに喋りまくっていた皆にも疲れが見えてくる。そう言う俺も坂道ばっかの道に疲れてきた。

壁山「つ、疲れてきたッス…栗松、木暮君…降りて欲しいッス」

栗松「分かったでヤンス…うう…。」

木暮「ええー役に立たないなあーこのデカブツっ！ウッシッシ」
音無「木暮君ッ！文句言うなら帰りなさいっ！！」

このようにいつもの展開が始まっては静まり…と言う繰り返しが度々展開されている。円堂「ん…？秋、あの建物じゃないのか？休憩所って…」

円堂君がそう言ったのはだいぶ時間が経った頃で、時計を見ると軽く7時間が経過していた。勿論休憩所に着くまでに何回か休憩はしたのだが皆の体力は限界寸前のようなのだ。

木野「え？…あ、そうよ。…ほら、ちょうど看板が見えてきたし。」
木野さんが指を指した先には小さな看板が建っている。
吹雪「やっ！と休憩所に着いたんだね…」

鬼道「そうだな…」

壁山「そろそろお昼ご飯の時間ッス…」

綱海「山登りを軽く見てたぜ…」

休憩所が目に見えてきた余裕か、皆の口数が増えてきた。

（又、中途半田でサーセンです；次話はこれを投稿した後直ぐに書くかと思っているので早めに投稿出来ると思います（↑殴）
（コピーして次話投稿してます；）

円堂「おお！！入り口だあっ！」

それまでくたくただった皆はその言葉で一気にペースを上げた。

不動「やっとかよ…」

立向居「そうですねっ！本当にやっ！とですよね」

虎丸「疲れたー」

豪炎寺「ふっ…まだ道のりは沢山あるぞ」

扉を開けるとそこは外側と違う古びた場所だった。

壁山「うわっ…！こ、ここ…本当に休憩所っすかあ…？なんか怖いっす」

木野「え、ええ…そのはず何だけど…酷い所ね」

成る程そこは誰も想像がつかなかった光景が広がっていた。

まず暗い。今日は真夏の真っ昼間、なのに天井の穴から出てくるか細い光しか辺りを照らすものはなかった。

円堂「前が見えな…いッ!」(どんっ

基山「ええええ、円堂君ッ!」?

先ほどからゆっくり動いていた円堂君が俺にぶつかる。

円堂「ヒロト?…あ、ごめんッ!大丈夫か?!」

基山「うん、全然平気だよ^^」

それよりも円堂君の顔が近い。しかも本気で心配してくれているから余計GOODきている。

全員が休憩所に入った頃、急に天気が崩れだした。

吹雪「山の天気は変わりやすいって言うしね」

音無「ですねー、ってッ!天井の穴から雨が…!」

立向居「わ、わわわっ冷たっ!」

綱海「大丈夫か?立向居…ほら、こうすればお前にかからないだろ?」(がばっと、立向居に覆い被さる綱海。

立向居「っ、つつつ綱海さんっ!!!／／／」

基山「……!」

さりげなく俺は円堂君に目をやる。

円堂「うおおうっ!冷てえー」

基山「……!!!!!!」

来た…俺の…俺の時代が…き、た、…ッ!(ビッチ

基山「円堂く…!ぐおおえんじい君ッッッッッッッ!」

見れば豪炎寺…いや豪園児君は綱立同様に円堂君に覆い被さっていた。

豪炎寺「ふっ……」(どやっ

基山「………ッ!!!!」

円堂「ヒロト、何か俺の事呼んだか?」

基山「え…いや、何でもないよぉー^^」
こういう風に昼と夕方を皆で過ごした。

P M…23時16分

急に円堂君がムクリと起き上がり、布団を抜け出していった。

基山「…？」

他の皆は今日の疲れかぐっすり眠っている。

ちなみに布団は古びた和室の中に（女子は別室）布団を敷き詰めて皆で寝ている。

俺は円堂君の行方を知りたかったので後をつけた。

どうやらトイレに行きたかったらしい。円堂君は小走り気味にトイレに続く長めの廊下を歩いていた。

そして円堂君がトイレに入ってから1分ぐらいが経ったとき、空がピカッと光る。「きゃあああああッ！！！！！！」

円堂君が入ったトイレから聞こえた悲鳴。

俺は咄嗟にドアをノックしまくっていた。

すると中から泣きそうな顔をした円堂君が飛び出してくる。

基山「ええ円堂君ッ！！！！！！／／／」

円堂「ヒロトおううっ！こ、怖い」

（3話終わりです；中途半田は香夜恒例の行事ですねww2話投稿してから書いてきたのに何このペースの遅さor駄作品さ：orz 申し訳ないです。）基山「え、あ、あああ…だだだ大丈夫、大丈夫だよ。円堂君／／／」

こんな顔をした円堂君を俺は一度も見ることがない。

しかも雷が嫌いだったとは…／／／

円堂「う、うう…」

するともう一度雷が鳴った。よく考えると山で雷が鳴るのは危険だ。

軽いキスだったのに円堂君は顔をリンゴのように赤く頬…いや、顔を染めていた。

つい俺はニコっとしてしまう。

そしてもう一度言った。

基山「円堂君、大好きです。」

翌朝の休憩所

（風丸視点）

朝起きたら円堂とヒロトが居なかった…。

今は朝の6時、昨日の疲れも取れて良い朝になると思っていたのにそれは慌ただしく俺を起こすマネージャー達によって崩れた。

木野「風丸君ッ！！起きてッ！！」

風丸「う…う…どうしたんだ？」

冬花「守くんとヒロトさんがいないんです…！」

円堂とヒロトが——居ない…！！！！？」

風丸「どういう事だよっ！？円堂とヒロトがいないって…！！」

辺りを見渡す。やはり円堂とヒロトは居ない。

他の皆はぐっすりと眠っている。

木野「朝ね、私たちが起きて皆を起こしに行こうと思ったら円堂とヒロト君が…風丸「居なかった…んだな？」

木野「ええ…」

それにしても何故円堂とヒロトが…？

まさかヒロト…円堂を襲ったりして…

いや、それは無い…かな？ああ見えてもヒロトは変態と言う名の紳士さんだからな…。

すると起きていたけど全く存在感が無かった眼鏡が口を開いた。

眼鏡「おほんっ！ええーと、昨日の夜の事ですけど…途中から雷と雨が酷くなっていました。」

風丸「それがどうしたんだ…？」

眼鏡「まあまあ…最後まで聞いてくださいよ。さつき円堂君とヒロト君の布団を調べたんですけどきつと僕が思うに、布団を出たのは夜です。」

風丸「ほ、本当か…ッ!!?…じゃあ二人は天候が悪い中、外を出たって事に…?」

眼鏡「…恐らく、そうでしょうね…。」

ここは円堂の貞操よりも二人の安否の方が心配になった。

情報を集める為、次々に皆を起こしていく。

まず円堂の右隣に寝ていた豪炎寺に聞いてみた。

豪炎寺「…いや、残念だが…見ていない…」

次は左隣にいた鬼道。

鬼道「何っ!? 円堂とヒロトが…ッ!!?……すまない…雷が鳴っていたのは気付いていたが円堂が何処かに行ったのは分からなかった…。」

そして扉の近くに寝ている立向居…がいない…?

…いや、よく見ると立向居は隣にいる綱海の布団に潜りこんでいる。

立向居「円堂さんがッ!!?…あ、でも俺綱海さんの布団に入れてもらうときふとヒロトさんの方見たんですよ、その時はまだ居ましたよ。ついでに雷も鳴っていませんでした。」

風丸「じ、時間は分かるかっ!？」

立向居「はい、丁度目覚まし時計を見るときにヒロトさんが見えましたから。P.M. 22時30分ちよつきりでしたっ!」

風丸「あ、ありがとう。立向居ッ!!」

立向居「いえ、お役にたてたら嬉しいです。」

とにかく円堂が行きそうな所を探してくることにする。

夜出るぐらいの用事と言えば…トイレ…ぐらいか…?

(四話、終わりです。…今回は…いや、やっぱり今回も中途半田…)

【イナイレ】山で——4話（後書き）

え…と、軽いキスってR—15じゃ無いですよ？

…大丈夫だ…きつと…；

tk、今更ながらにここまで見てくださっているみんな様はいるのでしょうか…？（ ）

…取り敢えず、見てくださっているみんな様、本当にありがとうございます。文章力や面白さを手に入れるため日々努力しています。不満や不快な点等ありましたらご指摘の方を宜しくお願い致します。

そして…私に感想を…下さi（ ）

【イナイレ】山で——5話（前書き）

結構シリアス：ww

ヒロトと円堂しか出てこないって言うorz

何か、今回は中途半田じゃない気がしますっ☆（うぜっ

ヒロ円は本命です（急

てか完結するのが長引くような気がしてなりません；

頑張って投稿するのを早めていくのですが…話が進まない…ッ！！！！

【イナイレ】山で——5話

！注意！

◎BL要素を含みます。

◎きっとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（FFIのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一気にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なァッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていたが、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウッシッシ「私もですっ！（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら俺も賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うわ。「います。

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉しい」
()

風丸「ん……？ 特訓なのか？……まあそれはともかく、円堂。細かい日程はどうするんだ？ あと集合場所とか集合時間とかどこに泊まる……

だとか…決めたのか？」

円堂「えっと…ま、ままだ…：決めてない…思いつきで言ったから…；」円堂はしょんぼりした顔で風丸を見た。

風丸「…：。まったく…相変わらずだな、円堂は」

鬼道「円堂、泊まる所と言えば山に鬼道家の別荘があるぞ…？」

輝く円堂の瞳。

風丸「計画なら俺に任せてくれ^^」

潤む円堂の瞳。

木野「道のりや案内は私たちがするわ！」

円堂は耐えきれなく、とうとう泣き出した。

円堂「あ、ありがとうっ皆っ！うう／／／」

すると会話に入ってこなかったヒロトが急に接近してきた…円堂に…。

基山「ハアハア／／／え、ええ円堂君…ッ！！色々ヤバイねッ／／ハアハア／／／」

こんなヒロトの変態ぶりに全く引かない円堂は天然or鈍感の域を越えてしまっているのかもしれない。

円堂「そうか？…とりあえず、集合時間だけでも決めとこうぜ」

皆が頷くと鬼道が移動時間を教えてくれた。

鬼道「○×バス停から徒歩で3日だそうだ。…勿論片道でな？」

円堂以外の皆の表情が固まっていく。

円堂「これも特訓だなッ！？よしッ！行こうぜッ！」

全員で全身全霊を込めて否定した。すると円堂は誰にも敵わない必殺技を出す。

円堂「だ…ダメ…かなあ？」目を潤ませて上目遣い気味に皆を見渡す。

基山「良いに決まってるじゃないかっ！！ハアハア／／／」

まずヒロトが反応する。

そして次々に円堂LOVEの面々が反応していく。

豪炎寺「俺も…行く／／／」いつもクールな豪炎寺だが今はもう円

堂に釘付けた。

鬼道「絶対行く何が何でも俺は円堂と行く行く。」

鬼道は壊れたようだった。多分ヒロト（普段）並にビッチスイッチが押されているだろう。

木野「「勿論行くわよ／＼／」

ふゆっぺ「私も行きます／＼／／」

音無「じゃあ私も行きますねっ」

一年生ズ「行く「ッス「よ「でやんす「行きます」

佐久間「鬼道が行くなら／＼／」

飛鷹「キャプテンがry（「と、言うように円堂のしたいことが次々に決まっていた。

（決まったことは下記に箇条書きにして書きました）

・集合時間…AM5時00分

・集合場所…稲妻山（私の勝手な妄想の山です↑）のバス停

・持ち物…必需品・お茶（大量）・生活用品…等

・宿泊所…鬼道の別荘

・バス停↓休憩所（1日過ごす）↓休憩所2（1日過ごす）↓休憩

所3（1日過ごす）↓（目印…銅像の様な墓）鬼道の別荘（三泊4

日）↓休憩所3から順に来た道に戻る（3日）↓バス停↓雷門で解散

・注意…長旅になるので準備はきちんとしておきましょう。また、

監督や保護者が来ないので自分の身は自分で守るようにしましょう。

（終わりです。ついでに回想も終わりです、長々と回想をいれてサ
ーセンでした；）

そして現在に至る。

風丸「取り敢えず円堂が落ち着いたら出発しようぜ。木野、まずは
休憩所までの地図を見せてくれ」

木野「うん…えーと、ここを右に曲がって…真っ直ぐ行って…ずつと歩いて看板が見えてきたら休憩所に着くみたいだよ」

木野さんが風丸君に説明していると円堂君が回復し始めた。

円堂「…ッふううううう…!!!」

風丸「…ま、円堂には完全に回復してもらいたいし…出席でもとるか…」

すると冬花さんが手際よく一枚の紙を手渡す。

冬花「はい、そう言うと思って昨日木野さんと出席簿を作ったんです。良かったら使ってください。」

風丸「おお…ありがとうございます。…じゃあ…」

風丸君は次々に皆の名前を呼び始めた。

そして呼ばれている間、円堂君は何故か俺に近づいて来る。

基山「？」

円堂「ヒロトお…眠たい…」

基山「!!!!!!」

びっくりした…。そして思わず円堂君の方に伸ばしていた手をみて更に驚く。

円堂「…? ヒロ「円堂おッ!!」

俺が襲いかけたのを間一髪で風丸君が間に入ってきた。

風丸「ふう…あ、えと…もう出発するぞ」

円堂「おうっ!!」

歩き始めて約2時間が経った。それまで五月蠅いくらいに喋りまくっていた皆にも疲れが見えてくる。そう言う俺も坂道ばっかの道に疲れてきた。

壁山「つ、疲れてきたッス…栗松、木暮君…降りて欲しいッス」
栗松「分かったでヤンス…うう…。」

木暮「ええー役に立たないなあーこのデカブツっ！ウッシッシ」
音無「木暮君ッ！文句言うなら帰りなさいっ！！」

このようにいつもの展開が始まっては静まり…と言う繰り返しが度々展開されている。円堂「ん…？秋、あの建物じゃないのか？休憩所って…」

円堂君がそう言ったのはだいぶ時間が経った頃で、時計を見ると軽く7時間が経過していた。勿論休憩所に着くまでに何回か休憩はしたのだが皆の体力は限界寸前のようなのだ。

木野「え？…あ、そうよ。…ほら、ちょうど看板が見えてきたし。」
木野さんが指を指した先には小さな看板が建っている。
吹雪「やっと休憩所に着いたんだね…」

鬼道「そうだな…」

壁山「そろそろお昼ご飯の時間ッス…」

綱海「山登りを軽く見てたぜ…」

休憩所が目に見えてきた余裕か、皆の口数が増えてきた。

（又、中途半田でサーセンです；次話はこれを投稿した後直ぐに書くかと思っているので早めに投稿出来ると思います（↑殴）
（コピーして次話投稿してます；）

円堂「おお！！入り口だあっ！」

それまでくたくただった皆はその言葉で一気にペースを上げた。

不動「やっとかよ…」

立向居「そうですねっ！本当にやっとなすよね」

虎丸「疲れたー」

豪炎寺「ふっ…まだ道のりは沢山あるぞ」

扉を開けるとそこは外側と違う古びた場所だった。

壁山「うわっ…！こ、ここ…本当に休憩所っすかぁ？…なんか怖いっす」

木野「え、ええ…そのはず何だけど…酷い所ね」

成る程そこは誰も想像がつかなかった光景が広がっていた。

まず暗い。今日は真夏の真っ昼間、なのに天井の穴から出てくるか細い光しか辺りを照らすものはなかった。

円堂「前が見えな…いッ!」(どんっ

基山「ええええ、円堂君ッ!」?

先ほどからゆっくり動いていた円堂君が俺にぶつかる。

円堂「ヒロト?…あ、ごめんッ!大丈夫か?!」

基山「うん、全然平気だよ^^」

それよりも円堂君の顔が近い。しかも本気で心配してくれているから余計GOODきている。

全員が休憩所に入った頃、急に天気が崩れだした。

吹雪「山の天気は変わりやすいって言うしね」

音無「ですねー、ってッ!天井の穴から雨が…!」

立向居「わ、わわわっ冷たっ!」

綱海「大丈夫か?立向居…ほら、こうすればお前にかからないだろ?」(がばっと、立向居に覆い被さる綱海。

立向居「っ、つつつ綱海さんっ!!!／／／」

基山「……!」

さりげなく俺は円堂君に目をやる。

円堂「うおおうっ!冷てえー」

基山「……!!!!!!」

来た…俺の…俺の時代が…き、た、…ッ!(ビッチ

基山「円堂く…!ぐおおえんじい君ッッッッッッッ!」

見れば豪炎寺…いや豪園児君は綱立同様に円堂君に覆い被さっていた。

豪炎寺「ふっ……」(どやっ

基山「……ッ!!!!」

円堂「ヒロト、何か俺の事呼んだか?」

基山「え…いや、何でもないよぉー^^」
こういう風に昼と夕方を皆で過ごした。

P M…23時16分

急に円堂君がムクリと起き上がり、布団を抜け出していった。

基山「…？」

他の皆は今日の疲れかぐっすり眠っている。

ちなみに布団は古びた和室の中に（女子は別室）布団を敷き詰めて皆で寝ている。

俺は円堂君の行方を知りたかったので後をつけた。

どうやらトイレに行きたかったらしい。円堂君は小走り気味にトイレに続く長めの廊下を歩いていた。

そして円堂君がトイレに入ってから1分ぐらいが経ったとき、空がピカッと光る。「きゃあああああッ！！！！！！」

円堂君が入ったトイレから聞こえた悲鳴。

俺は咄嗟にドアをノックしまくっていた。

すると中から泣きそうな顔をした円堂君が飛び出してくる。

基山「ええ円堂君ッ！！！！！！／／／」

円堂「ヒロトおううっ！こ、怖い」

（3話終わりです；中途半田は香夜恒例の行事ですなww2話投稿してから書いてきたのに何このペースの遅さor駄作品さ：orz 申し訳ないです。）基山「え、あ、あああ…だだだ大丈夫、大丈夫だよ。円堂君／／／」

こんな顔をした円堂君を俺は一度も見ることがない。

しかも雷が嫌いだったとは…／／／

円堂「う、うう…」

するともう一度雷が鳴った。よく考えると山で雷が鳴るのは危険だ。

基山「ツッ!!!!!!? 円堂君ツッ!!!!!!?」

見ると円堂君は休憩所を飛び出しひたすらに走っていた。
俺は円堂君を追いかける。

基山「円堂君んんッ!! 動いたら余計危ないよッッ!!!!!!」
だがパニックった円堂君の耳には届いていないらしく更に山の奥へと
進んでいく。

それから追いついたのは10分ぐらい経ってからだった。
勿論その10分の間にも雷が鳴り続けていた。

基山「円堂君ッ!!!!!!」

円堂「——ツッ!!!!!!!!!! ヒロトッ! ご、ごめんッッ!!!!!! 俺
：雷鳴るとすげえ怖くなって：その場から逃げ出したくなるんだ：
っ!」

円堂君はやつと自分の行動に理解をし、後悔をして顔を歪める。

基山「いいよ：全然俺は大丈夫。それより円堂君：もつと大事な問
題があるよ?」 円堂「……あ：ああアッ!!!!!!!! 帰れない
いッッ!!!!!! ヒロトッ!!!!!! ホントごめんッッ!!!!!!」

帰れない、それは結構大問題な事だ。

基山「うん、まあ俺は（円堂君が居るから）全然大丈夫（心が）な
んだけどね、：取り敢えず：そこら辺で止まるところ。丁度雨も止
んできたし。明るくなったら皆と会えるように休憩所の2に行つて
おこうよ」

円堂「あ、ああ……」

ふと見てみると円堂君の顔に陰がさしていた。

不意に俺は円堂君に抱きついてしまう。

円堂「——ッ!!!!!! ヒロト……」

基山「円堂君は笑っていて：俺は円堂君の笑顔が好きだから。」

正直に、素直に気持ちを伝えた。

円堂「……ありがとう。ヒロト：嬉しい。俺も：お、おお俺も：ヒ
ロトが：す：すう：す、すすす」

先は聞かなくても良い。唇で言葉を、告白を遮った。

軽いキスだったのに円堂君は顔をリンゴのように赤く頬…いや、顔を染めていた。

つい俺はニコっとしてしまう。

そしてもう一度言った。

基山「円堂君、大好きです。」

翌朝の休憩所

（風丸視点）

朝起きたら円堂とヒロトが居なかった…。

今は朝の6時、昨日の疲れも取れて良い朝になると思っていたのにそれは慌ただしく俺を起こすマネージャー達によって崩れた。

木野「風丸君ッ！！起きてッ！！」

風丸「う…う…どうしたんだ？」

冬花「守くんとヒロトさんがいないんです…！」

円堂とヒロトが——居ない…！！！！？」

風丸「どういう事だよっ！？円堂とヒロトがいないって…！！」

辺りを見渡す。やはり円堂とヒロトは居ない。

他の皆はぐっすりと眠っている。

木野「朝ね、私たちが起きて皆を起こしに行こうと思ったら円堂とヒロト君が…風丸「居なかった…んだな？」

木野「ええ…」

それにしても何故円堂とヒロトが…？

まさかヒロト…円堂を襲ったりして…

いや、それは無い…かな？ああ見えてもヒロトは変態と言う名の紳士さんだからな…。

すると起きていたけど全く存在感が無かった眼鏡が口を開いた。

眼鏡「おほんっ！ええーと、昨日の夜の事ですけど…途中から雷と雨が酷くなっていました。」

風丸「それがどうしたんだ…？」

眼鏡「まあまあ…最後まで聞いてくださいよ。さつき円堂君とヒロト君の布団を調べたんですけどきつと僕が思うに、布団を出たのは夜です。」

風丸「ほ、本当か…ッ!!?…じゃあ二人は天候が悪い中、外を出たって事に…?」

眼鏡「…恐らく、そうでしょうね…。」

ここは円堂の貞操よりも二人の安否の方が心配になった。

情報を集める為、次々に皆を起こしていく。

まず円堂の右隣に寝ていた豪炎寺に聞いてみた。

豪炎寺「…いや、残念だが…見ていない…」

次は左隣にいた鬼道。

鬼道「何っ!? 円堂とヒロトが…ッ!!?…すまない…雷が鳴っていたのは気付いていたが円堂が何処かに行ったのは分からなかった…。」

そして扉の近くに寝ている立向居…がいない…?

…いや、よく見ると立向居は隣にいる綱海の布団に潜りこんでいる。

立向居「円堂さんがッ!!?…あ、でも俺綱海さんの布団に入れてもらうときふとヒロトさんの方見たんですよ、その時はまだ居ましたよ。ついでに雷も鳴っていませんでした。」

風丸「じ、時間は分かるかっ!？」

立向居「はい、丁度目覚まし時計を見るときにヒロトさんが見えましたから。P.M. 22時30分ちよつきりでしたっ!」

風丸「あ、ありがとう。立向居ッ!!」

立向居「いえ、お役にたてたら嬉しいです。」

とにかく円堂が行きそうな所を探してくることにする。

夜出るぐらいの用事と言えば…トイレ…ぐらいか…?

(四話、終わりです。…今回は…いや、やっぱり今回も中途半田…)

＊＊ヒロトと円堂＊＊

基山「とにかく、何としてでも休憩所2に行かなきゃね」

円堂「あ、ああ…」

今は朝の6時30分。

あれから円堂君と俺は雷が止むまで木があまりない平地へ行った。雷が止むと途端に晴れてきた（と言っても辺りは真っ暗）ので近くに生えていた木に凭れて一晩を過ごした。（ちなみに時間は腕時計を着けているから分かる）

基山「…昨日のあれ…いけなかった？」

気になったので俺は聞いてみる。

円堂「へっ！？あ、いやッ！そんな事ないぜッ！た、ただ…あんな事したのに今日も普通な感じだったから…さ…ヒロト、こう言うのに慣れてるのかなって…考えちゃって…——ッ！…！ムググ」

慣れてなんかない、キスしたのだって円堂君が初めてだったし…それに、ほら…俺の鼓動は円堂君に反応し続けている。

そう伝える為にまた、キスをしていた。

円堂「ムグ——ふう………ごめん、ヒロト。疑って悪かった…」
顔を染めつつも笑顔を崩さない円堂君。

基山「…うん！」

それから目印を見つける為に俺らは歩き出した。

暫く無言だった…が、円堂君は不意にポツリと呟いた。

円堂「雷をさ…俺は好きになれないな…。例えばそれが俺の町のマークでも、勝利をもたらしてくれていても…無理…だな…」

基山「…そっか…俺は流星が嫌いかな？…」

円堂「…いつバレるのかなああー俺の怖いもの…」

基山「…バレるのが怖い？」

上を見上げる。

円堂「ああ…怖い。…失望されたりしたら嫌だからな…」

基山「失望なんかされないと思うけどなあ」

今日の円堂君には言っておきたい事がある。

円堂「…」

基山「チームの皆は仲間じゃなかったの？」

円堂「最高の仲間だ。」

基山「じゃあ…仲間にとっての君は最高の仲間じゃないとおもってる？」

円堂「…分かった。俺…ごめん…またヒロトに助けられたな」

基山「助けてなんかないよ、…それに…俺なんかいつも円堂君に助けられてるし」

君の笑顔と、言葉と、優しさと、勇気と…数えきれないものを沢山貰って…そして助けられてる。

円堂「……ははっ」基山「ふふっ…」

つい笑ってしまう。

円堂「…それが、仲間…だよな」

基山「だねっ」

それから暫く無言になるがそれは心地よいものだった。

【イナイレ】山で——5話（後書き）

ギリセーフでR-15じゃないはず…です。

見てくださったてるみん様、ありがとうございます。

初投稿から相変わらず文才が無い私ですがこれからも私の作品に目を通して下さると嬉しいです。

【イナイレ】山で——6話(前書き)

後半ヒロトののろけがまた始まります；

そしてやっと土方出せましたっ！↑

染岡がまだですが（）

→吹染のCPで出てきます……いつかつー！

前半は風丸視点です。

どうぞ見てやって下さい；

【イナイレ】山で——6話

！注意！

◎B L要素を含みます。

◎きつとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（F F Iのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一気にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なァッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていたが、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウッシッシ「私もですっ！（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら俺も賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うわ。「います。

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉しい」

風丸「ん……？ 特訓なのか？……まあそれはともかく、円堂。細かい日程はどうするんだ？ あと集合場所とか集合時間とかどこに泊まる……」

だとか…決めたのか？」

円堂「えっと…ま、ままだ…：決めてない…思いつきで言ったから…；」円堂はしょんぼりした顔で風丸を見た。

風丸「…：。まったく…相変わらずだな、円堂は」

鬼道「円堂、泊まる所と言えば山に鬼道家の別荘があるぞ…？」

輝く円堂の瞳。

風丸「計画なら俺に任せてくれ^^」

潤む円堂の瞳。

木野「道のりや案内は私たちがするわ！」

円堂は耐えきれなく、とうとう泣き出した。

円堂「あ、ありがとうっ皆っ！うう／／／」

すると会話に入ってこなかったヒロトが急に接近してきた…円堂に…。

基山「ハアハア／／／え、ええ円堂君…ッ！！色々ヤバイねッ／／ハアハア／／／」

こんなヒロトの変態ぶりに全く引かない円堂は天然or鈍感の域を越えてしまっているのかもしれない。

円堂「そうか？…とりあえず、集合時間だけでも決めようぜ」

皆が頷くと鬼道が移動時間を教えてくれた。

鬼道「○×バス停から徒歩で3日だそうだ。…勿論片道でな？」

円堂以外の皆の表情が固まっていく。

円堂「これも特訓だなッ！？よしッ！行こうぜッ！」

全員で全身全霊を込めて否定した。すると円堂は誰にも敵わない必殺技を出す。

円堂「だ…ダメ…かなあ？」目を潤ませて上目遣い気味に皆を見渡す。

基山「良いに決まってるじゃないかっ！！ハアハア／／／」

まずヒロトが反応する。

そして次々に円堂LOVEの面々が反応していく。

豪炎寺「俺も…行く／／／」いつもクールな豪炎寺だが今はもう円

堂に釘付けだ。

鬼道「絶対行く何が何でも俺は円堂と行く行く。」

鬼道は壊れたようだった。多分ヒロト（普段）並にビッチスイッチが押されているだろう。

木野「「勿論行くわよ／＼／」

ふゆっぺ「私も行きます／＼／／」

音無「じゃあ私も行きますねっ」

一年生ズ「行く「ッス「よ「でやんす「行きます」

佐久間「鬼道が行くなら／＼／」

飛鷹「キャプテンがry（「と、言うように円堂のしたいことが次々に決まっていた。

（決まったことは下記に箇条書きにして書きました）

・集合時間…AM5時00分

・集合場所…稲妻山（私の勝手な妄想の山です↑）のバス停

・持ち物…必需品・お茶（大量）・生活用品…等

・宿泊所…鬼道の別荘

・バス停↓休憩所（1日過ごす）↓休憩所2（1日過ごす）↓休憩

所3（1日過ごす）↓（目印…銅像の様な墓）鬼道の別荘（三泊4

日）↓休憩所3から順に来た道に戻る（3日）↓バス停↓雷門で解散

・注意…長旅になるので準備はきちんとしておきましょう。また、

監督や保護者が来ないので自分の身は自分で守るようにしましょう。

（終わりです。ついでに回想も終わりです、長々と回想をいれてサ
ーセンでした；）

そして現在に至る。

風丸「取り敢えず円堂が落ち着いたら出発しようぜ。木野、まずは
休憩所までの地図を見せてくれ」

木野「うん…えーと、ここを右に曲がって…真っ直ぐ行って…ずつと歩いて看板が見えてきたら休憩所に着くみたいだよ」

木野さんが風丸君に説明していると円堂君が回復し始めた。

円堂「…ッふううううう…!!!」

風丸「…ま、円堂には完全に回復してもらいたいし…出席でもとるか…」

すると冬花さんが手際よく一枚の紙を手渡す。

冬花「はい、そう言うと思って昨日木野さんと出席簿を作ったんです。良かったら使ってください。」

風丸「おお…ありがとうございます。…じゃあ…」

風丸君は次々に皆の名前を呼び始めた。

そして呼ばれている間、円堂君は何故か俺に近づいて来る。

基山「？」

円堂「ヒロトお…眠たい…」

基山「!!!!!!」

びっくりした…。そして思わず円堂君の方に伸ばしていた手をみて更に驚く。

円堂「…? ヒロ「円堂おッ!!」

俺が襲いかけたのを間一髪で風丸君が間に入ってきた。

風丸「ふう…あ、えと…もう出発するぞ」

円堂「おうっ!!」

歩き始めて約2時間が経った。それまで五月蠅いくらいに喋りまくっていた皆にも疲れが見えてくる。そう言う俺も坂道ばっかの道に疲れてきた。

壁山「つ、疲れてきたッス…栗松、木暮君…降りて欲しいッス」

栗松「分かったでヤンス…うう…。」

木暮「ええー役に立たないなあーこのデカブツっ！ウッシッシ」
音無「木暮君ッ！文句言うなら帰りなさいっ！！」

このようにいつもの展開が始まっては静まり…と言う繰り返しが度々展開されている。円堂「ん…？秋、あの建物じゃないのか？休憩所って…」

円堂君がそう言ったのはだいぶ時間が経った頃で、時計を見ると軽く7時間が経過していた。勿論休憩所に着くまでに何回か休憩はしたのだが皆の体力は限界寸前のようなのだ。

木野「え？…あ、そうよ。…ほら、ちょうど看板が見えてきたし。」
木野さんが指を指した先には小さな看板が建っている。
吹雪「やっ！と休憩所に着いたんだね…」

鬼道「そうだな…」

壁山「そろそろお昼ご飯の時間ッス…」

綱海「山登りを軽く見てたぜ…」

休憩所が目に見えてきた余裕か、皆の口数が増えてきた。

（又、中途半田でサーセンです；次話はこれを投稿した後直ぐに書くように思っているので早めに投稿出来ると思います（↑殴）
（コピーして次話投稿してます；）

円堂「おお！！入り口だあっ！」

それまでくたくただった皆はその言葉で一気にペースを上げた。

不動「やっとかよ…」

立向居「そうですねっ！本当にやっ！とですよね」

虎丸「疲れたー」

豪炎寺「ふっ…まだ道のりは沢山あるぞ」

扉を開けるとそこは外側と違う古びた場所だった。

壁山「うわっ…！こ、ここ…本当に休憩所っすかあ…？なんか怖いっす」

木野「え、ええ…そのはず何だけど…酷い所ね」

成る程そこは誰も想像がつかなかった光景が広がっていた。

まず暗い。今日は真夏の真っ昼間、なのに天井の穴から出てくるか細い光しか辺りを照らすものはなかった。

円堂「前が見えな…いッ!」(どんっ

基山「ええええ、円堂君ッ!」?

先ほどからゆっくり動いていた円堂君が俺にぶつかる。

円堂「ヒロト?…あ、ごめんッ!大丈夫か?!」

基山「うん、全然平気だよ^^」

それよりも円堂君の顔が近い。しかも本気で心配してくれているから余計GOODきている。

全員が休憩所に入った頃、急に天気が崩れだした。

吹雪「山の天気は変わりやすいって言うしね」

音無「ですねー、ってッ!天井の穴から雨が…!」

立向居「わ、わわわっ冷たッ!」

綱海「大丈夫か?立向居…ほら、こうすればお前にかからないだろ?」(がばっと、立向居に覆い被さる綱海。

立向居「っ、つつつ綱海さんっ!!!／／／」

基山「……!」

さりげなく俺は円堂君に目をやる。

円堂「うおおうっ!冷てえー」

基山「……!!!!!!」

来た…俺の…俺の時代が…き、た、…ッ!(ビッチ

基山「円堂く…!ぐおおえんじい君ッッッッッッッ!」

見れば豪炎寺…いや豪園児君は綱立同様に円堂君に覆い被さっていた。

豪炎寺「ふっ……」(どやっ

基山「……ッ!!!!」

円堂「ヒロト、何か俺の事呼んだか?」

基山「え…いや、何でもないよぉー^^」
こういう風に昼と夕方を皆で過ごした。

P M…23時16分

急に円堂君がムクリと起き上がり、布団を抜け出していった。

基山「…？」

他の皆は今日の疲れかぐっすり眠っている。

ちなみに布団は古びた和室の中に（女子は別室）布団を敷き詰めて皆で寝ている。

俺は円堂君の行方を知りたかったので後をつけた。

どうやらトイレに行きたかったらしい。円堂君は小走り気味にトイレに続く長めの廊下を歩いていた。

そして円堂君がトイレに入ってから1分ぐらいが経ったとき、空がピカッと光る。「きゃあああああッ！！！！！！」

円堂君が入ったトイレから聞こえた悲鳴。

俺は咄嗟にドアをノックしまくっていた。

すると中から泣きそうな顔をした円堂君が飛び出してくる。

基山「ええ円堂君ッ！！！！！！／／／」

円堂「ヒロトおううっ！こ、怖い」

（3話終わりです；中途半田は香夜恒例の行事ですなww2話投稿してから書いてきたのに何このペースの遅さor駄作品さ：orz 申し訳ないです。）基山「え、あ、あああ…だだだ大丈夫、大丈夫だよ。円堂君／／／」

こんな顔をした円堂君を俺は一度も見ることがない。

しかも雷が嫌いだったとは…／／／

円堂「う、うう…」

するともう一度雷が鳴った。よく考えると山で雷が鳴るのは危険だ。

基山「ツッ!!!!!!? 円堂君ツッ!!!!!!?」

見ると円堂君は休憩所を飛び出しひたすらに走っていた。
俺は円堂君を追いかける。

基山「円堂君んんッ!! 動いたら余計危ないよッッ!!!!!!!!!!」
だがパニックった円堂君の耳には届いていないらしく更に山の奥へと
進んでいく。

それから追いついたのは10分ぐらい経ってからだった。
勿論その10分の間にも雷が鳴り続けていた。

基山「円堂君ッ!!!!!!!!!!」

円堂「——ツッ!!!!!!!!!!!! ヒロトッ! ご、ごめんッッ!!!!!! 俺
：雷鳴るとすげえ怖くなって：その場から逃げ出したくなるんだ：
っ!」

円堂君はやつと自分の行動に理解をし、後悔をして顔を歪める。

基山「いいよ：全然俺は大丈夫。それより円堂君：もつと大事な問
題があるよ?」 円堂「……あ：ああッッ!!!!!!!!!! 帰れない
いッッ!!!!!!!!!! ヒロトッ!!!!!!!!!! ホントごめんッッ!!!!!!!!!!」

帰れない、それは結構大問題な事だ。

基山「うん、まあ俺は（円堂君が居るから）全然大丈夫（心が）な
んだけどね、：取り敢えず：そこら辺で止まるところ。丁度雨も止
んできたし。明るくなったら皆と会えるように休憩所の2に行つて
おこうよ」

円堂「あ、ああ……」

ふと見てみると円堂君の顔に陰がさしていた。

不意に俺は円堂君に抱きついてしまう。

円堂「——ッ!!!!!!!!!! ヒロト……」

基山「円堂君は笑っていて：俺は円堂君の笑顔が好きだから。」

正直に、素直に気持ちを伝えた。

円堂「……ありがとう。ヒロト：嬉しい。俺も：お、おお俺も：ヒ
ロトが：す：すう：す、すすす」

先は聞かなくても良い。唇で言葉を、告白を遮った。

軽いキスだったのに円堂君は顔をリンゴのように赤く頬…いや、顔を染めていた。

つい俺はニコっとしてしまう。

そしてもう一度言った。

基山「円堂君、大好きです。」

翌朝の休憩所

（風丸視点）

朝起きたら円堂とヒロトが居なかった…。

今は朝の6時、昨日の疲れも取れて良い朝になると思っていたのにそれは慌ただしく俺を起こすマネージャー達によって崩れた。

木野「風丸君ッ！！起きてッ！！」

風丸「う…う…どうしたんだ？」

冬花「守くんとヒロトさんがいないんです…！」

円堂とヒロトが——居ない…！！！！？」

風丸「どういう事だよっ！？円堂とヒロトがいないって…！！」

辺りを見渡す。やはり円堂とヒロトは居ない。

他の皆はぐっすりと眠っている。

木野「朝ね、私たちが起きて皆を起こしに行こうと思ったら円堂とヒロト君が…風丸「居なかった…んだな？」

木野「ええ…」

それにしても何故円堂とヒロトが…？

まさかヒロト…円堂を襲ったりして…

いや、それは無い…かな？ああ見えてもヒロトは変態と言う名の紳士さんだからな…。

すると起きていたけど全く存在感が無かった眼鏡が口を開いた。

眼鏡「おほんっ！ええーと、昨日の夜の事ですけど…途中から雷と雨が酷くなっていました。」

風丸「それがどうしたんだ…？」

眼鏡「まあまあ…最後まで聞いてくださいよ。さつき円堂君とヒロト君の布団を調べたんですけどきつと僕が思うに、布団を出たのは夜です。」

風丸「ほ、本当か…ッ!!?…じゃあ二人は天候が悪い中、外を出たって事に…?」

眼鏡「…恐らく、そうでしょうね…。」

ここは円堂の貞操よりも二人の安否の方が心配になった。

情報を集める為、次々に皆を起こしていく。

まず円堂の右隣に寝ていた豪炎寺に聞いてみた。

豪炎寺「…いや、残念だが…見ていない…」

次は左隣にいた鬼道。

鬼道「何っ!? 円堂とヒロトが…ッ!!?…すまない…雷が鳴っていたのは気付いていたが円堂が何処かに行ったのは分からなかった…。」

そして扉の近くに寝ている立向居…がいない…?

…いや、よく見ると立向居は隣にいる綱海の布団に潜りこんでいる。

立向居「円堂さんがッ!!?…あ、でも俺綱海さんの布団に入れてもらうときふとヒロトさんの方見たんですよ、その時はまだ居ましたよ。ついでに雷も鳴っていませんでした。」

風丸「じ、時間は分かるかっ!？」

立向居「はい、丁度目覚まし時計を見るときにヒロトさんが見えましたから。P.M. 22時30分ちよつきりでしたっ!」

風丸「あ、ありがとう。立向居ッ!!」

立向居「いえ、お役にたてたら嬉しいです。」

とにかく円堂が行きそうな所を探してくることにする。

夜出るぐらいの用事と言えば…トイレ…ぐらいか…?

(四話、終わりです。…今回は…いや、やっぱり今回も中途半田…)

＊＊ヒロトと円堂＊＊

基山「とにかく、何としてでも休憩所2に行かなきゃね」

円堂「あ、ああ…」

今は朝の6時30分。

あれから円堂君と俺は雷が止むまで木があまりない平地へ行った。雷が止むと途端に晴れてきた（と言っても辺りは真っ暗）ので近くに生えていた木に凭れて一晩を過ごした。（ちなみに時間は腕時計を着けているから分かる）

基山「…昨日のあれ…いけなかった？」

気になったので俺は聞いてみる。

円堂「へっ!？あ、いやッ!！そんな事ないぜッ!！た、ただ…あんな事したのに今日も普通な感じだったから…さ…ヒロト、こう言うのに慣れてるのかなって…考えちゃって…——ッ!!!…ムググ」

慣れてなんかない、キスしたのだって円堂君が初めてだったし…それに、ほら…俺の鼓動は円堂君に反応し続けている。

そう伝える為にまた、キスをしていた。

円堂「ムグ——ふう………ごめん、ヒロト。疑って悪かった…」
顔を染めつつも笑顔を崩さない円堂君。

基山「…うん!」

それから目印を見つける為に俺らは歩き出した。

暫く無言だった…が、円堂君は不意にポツリと呟いた。

円堂「雷をさ…俺は好きになれないな…。例えそれが俺の町のマークでも、勝利をもたらしてくれていても…無理…だな…」

基山「…そっか…俺は流星が嫌いかな?…」

円堂「…いつバレるのかなああー俺の怖いもの…」

基山「…バレるのが怖い?」

上を見上げる。

円堂「ああ…怖い。…失望されたりしたら嫌だからな…」

基山「失望なんかされないと思うけどなあ」

今日の円堂君には言っておきたい事がある。

円堂「…」

基山「チームの皆は仲間じゃなかったの？」

円堂「最高の仲間だ。」

基山「じゃあ…仲間にとっての君は最高の仲間じゃないとおもってる？」

円堂「…分かった。俺…ごめん…またヒロトに助けられたな」

基山「助けてなんかないよ、…それに…俺なんかいつも円堂君に助けられてるし」

君の笑顔と、言葉と、優しさと、勇気と…数えきれないものを沢山貰って…そして助けられてる。

円堂「……ははっ」基山「ふふっ…」

つい笑ってしまう。

円堂「…それが、仲間…だよな」

基山「だねっ」

それから暫く無言になるがそれは心地よいものだった。

風丸視点

そう言えばずっと前に円堂が嫌いなもの言ってた気がする。

不意に俺は扉が開いたままのトイレの前に立ちながら昔の事を思い出していた。

円堂『俺さ…***が嫌いだし、鳴ると何かその場から逃げ出したくなるんだ』

——？円堂は何が嫌いだった…？

***か、…り…。

かみなり…。

『俺さ：雷が嫌いでさ、鳴ると何かその場から逃げ出したくなるんだ』

そうだった。円堂は雷が嫌いで……。

今更ながらに思い出した意味を理解した。

風丸「まさか：円堂がトイレに行った時ちょうど雷が鳴ったのか：？」

立向居が言ってたように22時30分は居た。時間を絞れば22時30分／＼朝：いや、眼鏡が出ていったのは夜って言ってたから深夜の2時3時辺りか？

だとすると：今は5時ぐらいだから：そんなに遠くに行っていないかもだな。

それにヒロトも居るし、こう言う時の常識ぐらい備わっているだろう。

俺だったら休憩所2に先回りしちゃうかな：？

風丸「うおッ！！？——っ土方っ！！？」

部屋に戻ろうと振り返ると土方がいた。

土方「風丸か！ってどうしたんだ？トイレの前でずっとじっとしてたけど」

風丸「……いや、何でもないよ」

円堂達の事を言おうかと思ったが面倒くさいのでやめた。どうせ後で知ることになるだろうし……。

そう思って部屋に戻ろうとしたが土方が後ろから呼び止めてきた。

土方「なあ、風丸。昨日の夜：俺、見たぞ？」

風丸「——っ！！？」

土方「円堂が出ていった後に基山が後追いかけてたからな：、気になって俺もついていったんだよ。……円堂のやつ、すげえ悲鳴出して基山に抱きついてたな。俺は邪魔したらあれだと思って戻ったよ。」

「——
やっぱりトイレに行ってる途中に雷が鳴ったのか……。」

：どちらにしろ俺たちは次の目的地に行くのだが。

風丸「そう…か。」

土方「おう、じゃあな」

その後俺たちは次の目的地へと足を進めた。

ヒロト

円堂君にキスした。それだけで俺は死ぬるぐらい嬉しいのに、まさかの両想い…。隣を見るとニコニコ笑って楽しそうにしている円堂君。

自然と俺も笑顔になれる。

円堂君が居るから俺はこんな時でも焦りを感じることも無く、むしろ気分は最高潮になるんだ。

基山「ねえ…ま、守？」

円堂「ん？何だ？ヒロト」

基山「ううん、何でもないよ」

数回繰り返した。

だが円堂君は全く気が付かなく全て同じ言葉で返事をしてくる。

だがふと円堂君の顔を覗き込んだ時に気が付いた。

頬が赤く染まり、少しだけニヤけている事を。

（6話終わりです；）

【イナイレ】山で——6話（後書き）

佐久間全然描写してないッ！！実は布団の順番で鬼道の隣に寝てたんですっ！！

→急ですねっすみません；

中途半田でごめんなさいです。

投稿遅いですね：orz

でも意外な話展開を目指して頑張ろう：かな？（）

そしてッ！！見てくださってどうもありがとうございますッ！！！！

【イナイレ】山で——7話（前書き）

投稿遅れたあゝ見てくださる方（神様）は少ないと思いますけど、すみませんでした。

一応、これでも勉強に励んでいる最中なもので…；

ごめんなさい、言い訳です；；

今更ながらに注意書き↑

◎風丸のキャラ崩壊です

◎ヒロトがビッチじゃないッ…。

◎矛盾有りまくりです、気付いてて書いてること気付いてないと
ことがありますけどそこは超次元or矛盾なんて海に比べたry（

◎円堂おかしい。尋常じゃないくらいおかしいですw

◎ヒロ円カプ成立したのに未だに話を続けていると言う…（^| ^；
）

◎話の展開遅くて超次元です；

こんな小説ですが見てやって下さい、・ω・↑

【イナイレ】山で——7話

！注意！

◎B L要素を含みます。

◎きっとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（F F Iのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一気にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なあッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていたが、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウツシッシ」「私もですっ！」（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら俺も賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うわ。「います。

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉しい」
()

風丸「ん……？ 特訓なのか？……まあそれはともかく、円堂。細かい日程はどうするんだ？ あと集合場所とか集合時間とかどこに泊まる……」

だとか…決めたのか？」

円堂「えっと…ま、ままだ…：決めてない…思いつきで言ったから…；」円堂はしょんぼりした顔で風丸を見た。

風丸「…：。まったく…相変わらずだな、円堂は」

鬼道「円堂、泊まる所と言えば山に鬼道家の別荘があるぞ…？」

輝く円堂の瞳。

風丸「計画なら俺に任せてくれ^^」

潤む円堂の瞳。

木野「道のりや案内は私たちがするわ！」

円堂は耐えきれなく、とうとう泣き出した。

円堂「あ、ありがとうっ皆っ！うう／／／」

すると会話に入ってこなかったヒロトが急に接近してきた…円堂に…。

基山「ハアハア／／／え、ええ円堂君…ッ！！色々ヤバイねッ／／ハアハア／／／」

こんなヒロトの変態ぶりに全く引かない円堂は天然or鈍感の域を越えてしまっているのかもしれない。

円堂「そうか？…とりあえず、集合時間だけでも決めとこうぜ」

皆が頷くと鬼道が移動時間を教えてくれた。

鬼道「○×バス停から徒歩で3日だそうだ。…勿論片道でな？」

円堂以外の皆の表情が固まっていく。

円堂「これも特訓だなッ！？よしッ！行こうぜッ！」

全員で全身全霊を込めて否定した。すると円堂は誰にも敵わない必殺技を出す。

円堂「だ…ダメ…かなあ？」目を潤ませて上目遣い気味に皆を見渡す。

基山「良いに決まってるじゃないかっ！！ハアハア／／／」

まずヒロトが反応する。

そして次々に円堂LOVEの面々が反応していく。

豪炎寺「俺も…行く／／／」いつもクールな豪炎寺だが今はもう円

堂に釘付けだ。

鬼道「絶対行く何が何でも俺は円堂と行く行く。」

鬼道は壊れたようだった。多分ヒロト（普段）並にビッチスイッチが押されているだろう。

木野「「勿論行くわよ／＼／」

ふゆっぺ「私も行きます／＼／／」

音無「じゃあ私も行きますねっ」

一年生ズ「行く「ッス「よ「でやんす「行きます」

佐久間「鬼道が行くなら／＼／」

飛鷹「キャプテンがry（「と、言うように円堂のしたいことが次々に決まっていた。

（決まったことは下記に箇条書きにして書きました）

・集合時間…AM5時00分

・集合場所…稲妻山（私の勝手な妄想の山です↑）のバス停

・持ち物…必需品・お茶（大量）・生活用品…等

・宿泊所…鬼道の別荘

・バス停↓休憩所（1日過ごす）↓休憩所2（1日過ごす）↓休憩

所3（1日過ごす）↓（目印…銅像の様な墓）鬼道の別荘（三泊4

日）↓休憩所3から順に来た道に戻る（3日）↓バス停↓雷門で解散

・注意…長旅になるので準備はきちんとしておきましょう。また、

監督や保護者が来ないので自分の身は自分で守るようにしましょう。

（終わりです。ついでに回想も終わりです、長々と回想をいれてサ
ーセンでした；）

そして現在に至る。

風丸「取り敢えず円堂が落ち着いたら出発しようぜ。木野、まずは
休憩所までの地図を見せてくれ」

木野「うん…えーと、ここを右に曲がって…真っ直ぐ行って…ずつと歩いて看板が見えてきたら休憩所に着くみたいだよ」

木野さんが風丸君に説明していると円堂君が回復し始めた。

円堂「…ッふううううう…!!!」

風丸「…ま、円堂には完全に回復してもらいたいし…出席でもとるか…」

すると冬花さんが手際よく一枚の紙を手渡す。

冬花「はい、そう言うと思って昨日木野さんと出席簿を作ったんです。良かったら使ってください。」

風丸「おお…ありがとうございます。…じゃあ…」

風丸君は次々に皆の名前を呼び始めた。

そして呼ばれている間、円堂君は何故か俺に近づいて来る。

基山「？」

円堂「ヒロトお…眠たい…」

基山「!!!!!!」

びっくりした…。そして思わず円堂君の方に伸ばしていた手をみて更に驚く。

円堂「…? ヒロ「円堂おッ!!」

俺が襲いかけたのを間一髪で風丸君が間に入ってきた。

風丸「ふう…あ、えと…もう出発するぞ」

円堂「おうっ!!」

歩き始めて約2時間が経った。それまで五月蠅いくらいに喋りまくっていた皆にも疲れが見えてくる。そう言う俺も坂道ばっかの道に疲れてきた。

壁山「つ、疲れてきたッス…栗松、木暮君…降りて欲しいッス」
栗松「分かったでヤンス…うう…。」

木暮「ええー役に立たないなあーこのデカブツっ！ウッシッシ」
音無「木暮君ッ！文句言うなら帰りなさいっ！！」

このようにいつもの展開が始まっては静まり…と言う繰り返しが度々展開されている。円堂「ん…？秋、あの建物じゃないのか？休憩所って…」

円堂君がそう言ったのはだいぶ時間が経った頃で、時計を見ると軽く7時間が経過していた。勿論休憩所に着くまでに何回か休憩はしたのだが皆の体力は限界寸前のようなのだ。

木野「え？…あ、そうよ。…ほら、ちょうど看板が見えてきたし。」
木野さんが指を指した先には小さな看板が建っている。
吹雪「やっ！と休憩所に着いたんだね…」

鬼道「そうだな…」

壁山「そろそろお昼ご飯の時間ッス…」

綱海「山登りを軽く見てたぜ…」

休憩所が目に見えてきた余裕か、皆の口数が増えてきた。

（又、中途半田でサーセンです；次話はこれを投稿した後直ぐに書くかと思っているので早めに投稿出来ると思います（↑殴）
（コピーして次話投稿してます；）

円堂「おお！！入り口だあっ！」

それまでくたくただった皆はその言葉で一気にペースを上げた。

不動「やっとかよ…」

立向居「そうですねっ！本当にやっ！とですよね」

虎丸「疲れたー」

豪炎寺「ふっ…まだ道のりは沢山あるぞ」

扉を開けるとそこは外側と違う古びた場所だった。

壁山「うわっ…！こ、ここ…本当に休憩所っすかあ…？なんか怖いっす」

木野「え、ええ…そのはず何だけど…酷い所ね」

成る程そこは誰も想像がつかなかった光景が広がっていた。

まず暗い。今日は真夏の真っ昼間、なのに天井の穴から出てくるか細い光しか辺りを照らすものはなかった。

円堂「前が見えな…いッ！」（どんっ

基山「ええええ、円堂君ッ!？」

先ほどからゆっくり動いていた円堂君が俺にぶつかる。

円堂「ヒロト?…あ、ごめんッ!大丈夫か?!」

基山「うん、全然平気だよ^^」

それよりも円堂君の顔が近い。しかも本気で心配してくれているから余計GOODきている。

全員が休憩所に入った頃、急に天気が崩れだした。

吹雪「山の天気は変わりやすいって言うしね」

音無「ですねー、ってッ!天井の穴から雨が…!」

立向居「わ、わわわっ冷たっ!

綱海「大丈夫か?立向居…ほら、こうすればお前にかからないだろ

?」（がばっと、立向居に覆い被さる綱海。

立向居「っ、つつつ綱海さんっ!!!／／／」

基山「……!」

さりげなく俺は円堂君に目をやる。

円堂「うおおうっ!冷てえー」

基山「……!!!!!!」

来た…俺の…俺の時代が…き、た、…ッ!（ビッチ

基山「円堂く…!ぐおおえんじい君ッッッッッッッッ!」

見れば豪炎寺…いや豪園児君は綱立同様に円堂君に覆い被さっていた。

豪炎寺「ふっ……」（どやっ

基山「……ッ!!!!」

円堂「ヒロト、何か俺の事呼んだか?」

基山「え…いや、何でもないよぉー^^」
こういう風に昼と夕方を皆で過ごした。

P M…23時16分

急に円堂君がムクリと起き上がり、布団を抜け出していった。

基山「…？」

他の皆は今日の疲れかぐっすり眠っている。

ちなみに布団は古びた和室の中に（女子は別室）布団を敷き詰めて皆で寝ている。

俺は円堂君の行方を知りたかったので後をつけた。

どうやらトイレに行きたかったらしい。円堂君は小走り気味にトイレに続く長めの廊下を歩いていた。

そして円堂君がトイレに入ってから1分ぐらいが経ったとき、空がピカッと光る。「きゃあああああッ！！！！！！！！」

円堂君が入ったトイレから聞こえた悲鳴。

俺は咄嗟にドアをノックしまくっていた。

すると中から泣きそうな顔をした円堂君が飛び出してくる。

基山「ええ円堂君ッ！！！！！！！！／／／／」

円堂「ヒロトおうううっ！こ、怖い」

（3話終わりです；中途半田は香夜恒例の行事ですなww2話投稿してから書いてきたのに何このペースの遅さor駄作品さ：orz申し訳ないです。）基山「え、あ、あああ…だだだ大丈夫、大丈夫だよ。円堂君／／／」

こんな顔をした円堂君を俺は一度も見ることがない。

しかも雷が嫌いだったとは…／／／

円堂「う、うう…」

するともう一度雷が鳴った。よく考えると山で雷が鳴るのは危険だ。

基山「ツツ!!!!!!? 円堂君ツツ!!!!!!?」

見ると円堂君は休憩所を飛び出しひたすらに走っていた。俺は円堂君を追いかける。

基山「円堂君んーッ！！動いたら余計危ないよッッ！！！！！！」
だがパニクった円堂君の耳には届いていないらしく更に山の奥へと
進んでいく。

それから追いついたのは10分ぐらい経ってからだった。

勿論その10分の間にも雷が鳴り続いていた。

基山「円堂君ッ！！！！」

田堂「——ツツ！！！！！！！！！！ヒロトツ！ご、ごめんツツ！！！！俺……雷鳴るとすげえ怖くなって……その場から逃げ出したくなるんだ……っ！」

円堂君はやつと自分の行動に理解をし、後悔をして顔を歪める。

基山「いいよ……全然俺は大丈夫。それより円堂君……もっと大事な問題があるよ？」円堂「……あ……ああッッ……！！！！！！帰れないッッ！！！！！！ヒロトッッ！！！！！！ホントごめんッッ！！！！！！」

帰れない、それは結構大問題な事だ。

基山「うん、まあ俺は（円堂君が居るから）全然大丈夫（心が）な
んだけどね、：取り敢えず：そこら辺で止まるところ。丁度雨も止
んできたし。明るくなったら皆と会えるように休憩所の2に行つて
おこつよ」

円堂「あ、ああ……」

ふと見てみると円堂君の顔に陰がさしていた。

不意に俺は円堂君に抱きついてしまう。

円堂「——ッ……ヒロト……」

基山「円堂君は笑っていて…俺は円堂君の笑顔が好きだから。」

正直に、素直に気持ちを伝えた。

円堂「……ありがとう。ヒロト……嬉しい。俺も……お、おお俺も……ヒロトが……す……すう……す、すすす」

先は聞かなくても良い。唇で言葉を、告白を遮った。

軽いキスだったのに円堂君は顔をリンゴのように赤く頬…いや、顔を染めていた。

つい俺はニコっとしてしまう。

そしてもう一度言った。

基山「円堂君、大好きです。」

翌朝の休憩所

（風丸視点）

朝起きたら円堂とヒロトが居なかった…。

今は朝の6時、昨日の疲れも取れて良い朝になると思っていたのにそれは慌ただしく俺を起こすマネージャー達によって崩れた。

木野「風丸君ッ！！起きてッ！！」

風丸「う…う…どうしたんだ？」

冬花「守くんとヒロトさんがいないんです…！」

円堂とヒロトが——居ない…！！！！？」

風丸「どういう事だよっ！？円堂とヒロトがいないって…！！」

辺りを見渡す。やはり円堂とヒロトは居ない。

他の皆はぐっすりと眠っている。

木野「朝ね、私たちが起きて皆を起こしに行こうと思ったら円堂とヒロト君が…風丸「居なかった…んだな？」

木野「ええ…」

それにしても何故円堂とヒロトが…？

まさかヒロト…円堂を襲ったりして…

いや、それは無い…かな？ああ見えてもヒロトは変態と言う名の紳士さんだからな…。

すると起きていたけど全く存在感が無かった眼鏡が口を開いた。

眼鏡「おほんっ！ええーと、昨日の夜の事ですけど…途中から雷と雨が酷くなっていました。」

風丸「それがどうしたんだ…？」

眼鏡「まあまあ…最後まで聞いてくださいよ。さつき円堂君とヒロト君の布団を調べたんですけどきつと僕が思うに、布団を出たのは夜です。」

風丸「ほ、本当か…ッ!!?…じゃあ二人は天候が悪い中、外を出たって事に…?」

眼鏡「…恐らく、そうでしょうね…。」

ここは円堂の貞操よりも二人の安否の方が心配になった。

情報を集める為、次々に皆を起こしていく。

まず円堂の右隣に寝ていた豪炎寺に聞いてみた。

豪炎寺「…いや、残念だが…見ていない…」

次は左隣にいた鬼道。

鬼道「何っ!? 円堂とヒロトが…ッ!!?…すまない…雷が鳴っていたのは気付いていたが円堂が何処かに行ったのは分からなかった…。」

そして扉の近くに寝ている立向居…がいない…?

…いや、よく見ると立向居は隣にいる綱海の布団に潜りこんでいる。

立向居「円堂さんがッ!!?…あ、でも俺綱海さんの布団に入れてもらうときふとヒロトさんの方見たんですよ、その時はまだ居ましたよ。ついでに雷も鳴っていませんでした。」

風丸「じ、時間は分かるかっ!？」

立向居「はい、丁度目覚まし時計を見るときにヒロトさんが見えましたから。P.M. 22時30分ちよつきりでしたっ!」

風丸「あ、ありがとう。立向居ッ!!」

立向居「いえ、お役にたてたら嬉しいです。」

とにかく円堂が行きそうな所を探してくることにする。

夜出るぐらいの用事と言えば…トイレ…ぐらいか…?

(四話、終わりです。…今回は…いや、やっぱり今回も中途半田…)

＊＊ヒロトと円堂＊＊

基山「とにかく、何としてでも休憩所2に行かなきゃね」

円堂「あ、ああ…」

今は朝の6時30分。

あれから円堂君と俺は雷が止むまで木があまりない平地へ行った。雷が止むと途端に晴れてきた（と言っても辺りは真っ暗）ので近くに生えていた木に凭れて一晩を過ごした。（ちなみに時間は腕時計を着けているから分かる）

基山「…昨日のあれ…いけなかった？」

気になったので俺は聞いてみる。

円堂「へっ！？あ、いやッ！そんな事ないぜッ！た、ただ…あんな事したのに今日も普通な感じだったから…さ…ヒロト、こう言うのに慣れてるのかなって…考えちゃって…——ッ！…！ムググ」

慣れてなんかない、キスしたのだって円堂君が初めてだったし…それに、ほら…俺の鼓動は円堂君に反応し続けている。

そう伝える為にまた、キスをしていた。

円堂「ムグ——ふう…：…：ごめん、ヒロト。疑って悪かった…」
顔を染めつつも笑顔を崩さない円堂君。

基山「…うん！」

それから目印を見つける為に俺らは歩き出した。

暫く無言だった…が、円堂君は不意にポツリと呟いた。

円堂「雷をさ…俺は好きになれないな…。例えばそれが俺の町のマークでも、勝利をもたらしてくれていても…無理…だな…」

基山「…そっか…俺は流星が嫌いかな？…」

円堂「…いつバレるのかなああー俺の怖いもの…」

基山「…バレるのが怖い？」

上を見上げる。

円堂「ああ…怖い。…失望されたりしたら嫌だからな…」

基山「失望なんかされないと思うけどなあ」

今日の円堂君には言っておきたい事がある。

円堂「…」

基山「チームの皆は仲間じゃなかったの？」

円堂「最高の仲間だ。」

基山「じゃあ…仲間にとっての君は最高の仲間じゃないとおもってる？」

円堂「…分かった。俺…ごめん…またヒロトに助けられたな」

基山「助けてなんかないよ、…それに…俺なんかいつも円堂君に助けられてるし」

君の笑顔と、言葉と、優しさと、勇気と…数えきれないものを沢山貰って…そして助けられてる。

円堂「……ははっ」基山「ふふっ…」

つい笑ってしまう。

円堂「…それが、仲間…だよな」

基山「だねっ」

それから暫く無言になるがそれは心地よいものだった。

風丸視点

そう言えばずっと前に円堂が嫌いなもの言ってた気がする。

不意に俺は扉が開いたままのトイレの前に立ちながら昔の事を思い出していた。

円堂『俺さ…***が嫌いだし、鳴ると何かその場から逃げ出したくなるんだ』

——？円堂は何が嫌いだった…？

***か、…り…。

かみなり…。

『俺さ：雷が嫌いでさ、鳴ると何かその場から逃げ出したくなるんだ』

そうだった。円堂は雷が嫌いで……。

今更ながらに思い出した意味を理解した。

風丸「まさか：円堂がトイレに行った時ちょうど雷が鳴ったのか：？」

立向居が言っていたように22時30分は居た。時間を絞れば22時30分／＼朝：いや、眼鏡が出ていったのは夜って言っていたから深夜の2時3時辺りか？

だとすると：今は5時ぐらいだから：そんなに遠くに行っていないかもだな。

それにヒロトも居るし、こう言う時の常識ぐらい備わっているだろう。

俺だったら休憩所2に先回りしちゃうかな……？

風丸「うおッ！！？」——っ土方っ！？」

部屋に戻ろうと振り返ると土方がいた。

土方「風丸か！ってどうしたんだ？トイレの前でずっとじっとしてたけど」

風丸「……いや、何でもないよ」

円堂達の事を言おうかと思ったが面倒くさいのでやめた。どうせ後で知ることになるだろうし……。

そう思って部屋に戻ろうとしたが土方が後ろから呼び止めてきた。

土方「なあ、風丸。昨日の夜：俺、見たぞ？」

風丸「——っ！！？」

土方「円堂が出ていった後に基山が後追いかけてたからな……、気になって俺もついていったんだよ。……円堂のやつ、すげえ悲鳴出して基山に抱きついてたな。俺は邪魔したらあれだと思って戻ったよ。」

「——っ」

やっぱりトイレに行ってる途中に雷が鳴ったのか……。

：どちらにしろ俺たちは次の目的地に行くのだが。

風丸「そう…か。」

土方「おう、じゃあな」

その後俺たちは次の目的地へと足を進めた。

ヒロト

円堂君にキスした。それだけで俺は死ぬるぐらい嬉しいのに、まさかの両想い…。隣を見るとニコニコ笑って楽しそうにしている円堂君。

自然と俺も笑顔になれる。

円堂君が居るから俺はこんな時でも焦りを感じることも無く、むしろ気分は最高潮になるんだ。

基山「ねえ…ま、守？」

円堂「ん？何だ？ヒロト」

基山「ううん、何でもないよ」

数回繰り返した。

だが円堂君は全く気が付かなく全て同じ言葉で返事をしてくる。

だがふと円堂君の顔を覗き込んだ時に気が付いた。

頬が赤く染まり、少しだけニヤけている事を。

（6話終わりです；）休憩所は案外近くにあった。

歩くペースが速かったのもあるけど初日よりかはマシな距離だったし。

基山「守…体力大丈夫？すごい汗…はっ！！あ、あせ…／／／」

円堂「えっ！！？あ、大丈夫…だけど、何で近寄ってくんのっ？」

円堂君の汗ですら愛しく感じる…。

基山「守…。(ピーーっ↑(自己規制)しようッ!!」

円堂「えッ!!? お…おいっ!!!! 今はまだ休憩所に行かなきゃダメな時だろっ!!?」

——ん?

基山「今はまだ…? (ニヤ」

円堂「ち、違うッ!! えとっ!!? 違うッ!!」

腕を曲げ、胸の前で必死にブンブン手を振り回している円堂君…。愛くるしい仕草満載だな…。

基山「じゃあ…稲妻町に帰ったら…サッカー↑しようね」

円堂「サッカーするのか? …おうッ!! 帰ったらサッカーだなっ!!」

基山「絶対激しくしてみせるからね」

会話ばっかで全然歩いていないような気がするが実はもう休憩所に着いていたりする。

それからしばらく外で風丸君達が来るのを待ってる事にした。

風丸視点

歩いてから早くも3時間経過した。

壁山「しんどいッス…そろそろ休みましようっスう」

綱海「おいおい…さっき休んだばかりだろ」

木野「気持ちは分かるけどもうちょっとだから頑張ってっ!」
そう言っている木野はさほんどしんどそうには見えない。

染岡「なあ風丸。本当に円堂ら先に行ってるのかよ?」

俺の後ろを吹雪と歩いていた染岡が声をかけてくる。

風丸「…確認はないさ。でも俺は円堂とヒロトを信じてる」

染岡は何か言おうとし、口を開けたが結局何も言わずに「そっか」

とだけ言った。

不動「こつちが勝手に信じただけで会える確率はねえんじゃねーの？」

不動が会話に入る。

染岡「おいっ！！てめえ「ダメだよ染岡君ッ！！」

染岡が不動の言葉にキレ、殴りかかろうとするのを吹雪が止める。

風丸「染岡止せ…、俺は気にしてない。」

豪炎寺「不動、だから俺たちは信じるんだろ？」

いつの間にか俺の隣に来ていた豪炎寺が薄く微笑みながら不動の問いに答える。

不動「ハッ……。まあそれがお前らか…。」

豪炎寺の答えに納得したのか不動は黙った。

それに染岡と吹雪も静かになり、休憩所を見つけるまで皆暫く黙ったままだった。

風丸「あ、え！！円堂ッ！！！！ヒロトッ！！！！」ちゃんと居た。

円堂「風丸ッ！！！！皆っ！！！！！！！！ごめんッ！！！！」

円堂は腰を直角に曲げて謝っている。

基山「俺もごめん」風丸「ほんと良かったあ…」

心の中で安堵のため息をつく。安心したところでふと円堂の貞その（ ）が気になってくる。

風丸「…なあ、円堂？」

なるべく自然に…。

円堂「ん？何だ？」

風丸「ヒロトに…犯されてないかッ！！？大丈夫かッ！！？」

——ってしまったああアアッ！！率直すぎるぜ俺っ！！！！！！思わず理性の方が切れてしまったな…；
これじゃあ鈍感な円堂だって…

円堂「オカサレル？なんだよ？ソレ…。」

：気付かない、かあ；

風丸「何でもない。忘れてくれ」

円堂「?…分かった」

：言っておくが俺は過保護なだけであって円堂が恋愛として好きとかじゃ無いんだからな？

それに俺は緑川が好きだし。

雑談や再会の喜びを交わしたあと木野が休憩所のピロティに皆を集めた。

木野「皆、今日は1日も休まないで行くことになったよ」

皆「えええッ!!?」

音無「予定よりすぐ早く着いちゃいましたから…とにかく頑張りましたよっ!!」

皆の不満の声の中、円堂だけイキイキとしていた。

円堂「皆ッ!!!!!!行こうぜっ!!次は休憩所3だろ??楽勝だつてッ!!」

一拍の間があってから皆は円堂に釣られて

皆「おおおおオッッッ!!!!!!」

円堂に続き休憩所をそくさと出ていく皆。

ヒロトは何故か固まって動かない。

俺も動かない。

基山「…風丸君。俺に聞きたい事とかないの?」

風丸「山ほどあるけど今は一つだけ…」

チラッとこちらに向けるヒロトの顔はいつまで経っても凛々しく感じる。

休憩所を出ていった皆はまだ見えてるしあと少し時間を割いても大丈夫だろう。

基山「何かな?」

風丸「昨日…円堂に何かしたか?」

何回も言う。俺は過保護なだけだからな。

基山「キスしたよ」

躊躇いも顔の表情も無く答えるヒロトに少し面食らう。

風丸「……………そうか。……………」

基山「…うん。てかもう行こうよ」

風丸「ああ…。」

ヒロト

休憩所3に着いたのは夕方だった。

途中、円堂君のテンションが異常に上がって走ったりしたせいで皆へトへトだ。

晩御飯も今日は大量に出た。

円堂「なあッ!!皆ッ!!連想ゲームしよーぜっ!!」

唐突に、それも食事中に円堂君は言った。

立向居「ああッ!!良いですねっ!!やってみましょうよッ!!」

まず円堂君の意見には逆らわない立向居が発言。

綱海「そーだなあ」

皆「おうツツツ!!」

立向居と綱海に続き、皆の賛成の声があがった。

その日の夜は連想ゲームをしながら眠りについた。

(次回で最終話です;)

【イナイレ】山で——7話（後書き）

えーと、次で終わります。終わらせますっ。

ですがヒロ円中毒者の私……。いつまたヒロ円小説投稿しだすか分かりませんよっ！！？気を付けて下さいねッ！（次はR指定のやつ書きた（↑）

てか自己規制入れてごめんなさいです；

＊＊K S次回予告＊＊

ヒロ円フィーバーで、イチャイチャしまくってます。

お風呂での描写ありますが、下ネタや下品な描写は絶対にしませんっ！！

ちよい豪鬼＋佐久鬼＋不鬼……。てか鬼道総受け要素入ってます。

いよいよ鬼道の別荘に着けますね……。（＾|＾；）長かった。長引かせすぎましたよね……。

でも次で終わりっ（＾p＾）／

最終話は長くなると思います……。投稿いつになるでしょうね？f へ

| へ；

では、閲覧ありがとうございましたッ！！

【イナイレ】山で——8話（最終話）

！注意！

◎B L要素を含みます。

◎きっとヒロト君は変態と言う名の紳士さんなんです。

◎ヒロト視点です。

◎時期は…私が捏造しました（F F Iのメンバーです。

◎苦手な方は閲覧しないほうが良いですよ；

「円堂くうーんッ！」

夏休み、雷門イレブンの皆で山に泊まり掛けで息抜きをしに来ていた。ちらほらと皆が集まってくるなか、一人遅れて来たのは他でもない円堂君だった。

俺の呼び掛けで一気にスピードをあげた円堂君は息も絶え絶えにこちらへ走り寄ってくる。

「みんな、な、すまん…俺、持っていきたいもの、いっぱいあったからさっ！」そう言う円堂君のリュックサックはとても膨れていて重そうだった。

ちなみに、集合したのは朝の5時。こんなに早く集合したのには理由がある。

別に説明が面倒だからじゃないけどその理由は回想シーンに任せることにする。

回想*****

7月27日

夏休みの部活で円堂守はミーティング中、突然口を開いた。

円堂「なァッ！明後日皆で山に息抜きしにいかねえか？」

あまりにも唐突だったので皆は呆気にとられ暫くぽかーんとしていた。が、最初に口を開いたのは風丸だった。

風丸「俺は別に構わないが……。急にどうしたんだよ？ 円堂。」

円堂「最近さ、同じような特訓してばっかだろ？ それでも力はずく！……だけど俺：新しい特訓してみたい！……新しい特訓したら何かが変わるのかもしれない！……そう思ったんだ。」

すると、今まで黙り込んでいた皆が口々に言った。

基山「俺はいつでも円堂君の意見に賛成だよーッ！」

豪園児「成る程：円堂にしては少し焦り気味みたいだな：だが、俺もその案に乗せてもらおうでしょう」

鬼道「俺も：円堂の意見に賛成だ。」

一年生ズ「俺も「ッス」でやんす「です！」「だねウッシッシ「私もですっ！（↑春菜ちゃん）」

虎丸「豪炎寺先輩が賛成なら俺も賛成ですっ！」

飛鷹「キャプテンの意見なら何でも賛成します！」

吹雪「僕も、賛成だよ」

佐久間「俺も鬼道が賛成なら賛成だ。」

不動「ハッ：勝手にしたら？」

マネージャーズ「良いと思「うよ。「います。」

皆の言葉を聞いた円堂は目を輝かせて：

円堂「やったーッッ！！」と、一頻り叫んだ。

すると風丸が当たり前の疑問をぶつけてきた。

「と中途半田でサーセンです。話：続きます；見てくださると嬉しい」
()

風丸「ん……？ 特訓なのか？……まあそれはともかく、円堂。細かい日程はどうするんだ？ あと集合場所とか集合時間とかどこに泊まる……

だとか…決めたのか？」

円堂「えっと…ま、ままだ…：決めてない…思いつきで言ったから…；」円堂はしょんぼりした顔で風丸を見た。

風丸「…：。まったく…相変わらずだな、円堂は」

鬼道「円堂、泊まる所と言えば山に鬼道家の別荘があるぞ…？」

輝く円堂の瞳。

風丸「計画なら俺に任せてくれ^^」

潤む円堂の瞳。

木野「道のりや案内は私たちがするわ！」

円堂は耐えきれなく、とうとう泣き出した。

円堂「あ、ありがとうっ皆っ！うう／／／」

すると会話に入ってこなかったヒロトが急に接近してきた…円堂に…。

基山「ハアハア／／／え、ええ円堂君…ッ！！色々ヤバイねッ／／ハアハア／／／」

こんなヒロトの変態ぶりに全く引かない円堂は天然or鈍感の域を越えてしまっているのかもしれない。

円堂「そうか？…とりあえず、集合時間だけでも決めとこうぜ」

皆が頷くと鬼道が移動時間を教えてくれた。

鬼道「○×バス停から徒歩で3日だそうだ。…勿論片道でな？」

円堂以外の皆の表情が固まっていく。

円堂「これも特訓だなッ！？よしッ！行こうぜッ！」

全員で全身全霊を込めて否定した。すると円堂は誰にも敵わない必殺技を出す。

円堂「だ…ダメ…かなあ？」目を潤ませて上目遣い気味に皆を見渡す。

基山「良いに決まってるじゃないかっ！！ハアハア／／／」

まずヒロトが反応する。

そして次々に円堂LOVEの面々が反応していく。

豪炎寺「俺も…行く／／／」いつもクールな豪炎寺だが今はもう円

堂に釘付けだ。

鬼道「絶対行く何が何でも俺は円堂と行く行く。」

鬼道は壊れたようだった

。

木野「勿論行くよ／＼／」

ふゆっぺ「私も行きます／＼／／／」

音無「じゃあ私も行きますねっ」

一年生ズ「行く」ツス「よ」「でやんす」「行きます」

佐久間「鬼道が行くなら／＼／」

飛鷹「キャプテンがry（「と、言うように円堂のしたいことが次々に決まっていた。」

（決まったことは下記に箇条書きにして書きました）

・集合時間…AM5時00分

・集合場所…稲妻山（私の勝手な妄想の山です↑）のバス停

・持ち物…必需品・お茶（大量）・生活用品…等

・宿泊所…鬼道の別荘

・バス停↓休憩所（1日過ごす）↓休憩所2（1日過ごす）↓休憩

所3（1日過ごす）↓（目印…銅像の様な墓）鬼道の別荘（三泊4

日）↓休憩所3から順に来た道に戻る（3日）↓バス停↓雷門で解散

・注意…長旅になるので準備はきちんとしておきましょう。また、

監督や保護者が来ないので自分の身は自分で守るようにしましょう。

（終わりです。ついでに回想も終わりです、長々と回想をいれてサ
ーセンでした；）

そして現在に至る。

風丸「取り敢えず円堂が落ち着いたら出発しようぜ。木野、まずは
休憩所までの地図を見せてくれ」

木野「うん…えーと、ここを右に曲がって…真っ直ぐ行って…ずつと歩いて看板が見えてきたら休憩所に着くみたいだよ」

木野さんが風丸君に説明していると円堂君が回復し始めた。

円堂「…ッふううううう…!!!」

風丸「…ま、円堂には完全に回復してもらいたいし…出席でもとるか…」

すると冬花さんが手際よく一枚の紙を手渡す。

冬花「はい、そう言うと思って昨日木野さんと出席簿を作ったんです。良かったら使ってください。」

風丸「おお…ありがとうございます。…じゃあ…」

風丸君は次々に皆の名前を呼び始めた。

そして呼ばれている間、円堂君は何故か俺に近づいて来る。

基山「？」

円堂「ヒロトお…眠たい…」

基山「!!!!!!」

びっくりした…。そして思わず円堂君の方に伸ばしていた手をみて更に驚く。

円堂「…? ヒロ「円堂おッ!!」

俺が襲いかけたのを間一髪で風丸君が間に入ってきた。

風丸「ふう…あ、えと…もう出発するぞ」

円堂「おうっ!!」

歩き始めて約2時間が経った。それまで五月蠅いくらいに喋りまくっていた皆にも疲れが見えてくる。そう言う俺も坂道ばっかの道に疲れてきた。

壁山「つ、疲れてきたッス…栗松、木暮君…降りて欲しいッス」

栗松「分かったでヤンス…うう…。」

木暮「ええー役に立たないなあーこのデカブツっ！ウッシッシ」
音無「木暮君ッ！文句言うなら帰りなさいっ！！」

このようにいつもの展開が始まっては静まり…と言う繰り返しが度々展開されている。円堂「ん…？秋、あの建物じゃないのか？休憩所って…」

円堂君がそう言ったのはだいぶ時間が経った頃で、時計を見ると軽く7時間が経過していた。勿論休憩所に着くまでに何回か休憩はしたのだが皆の体力は限界寸前のようなのだ。

木野「え？…あ、そうよ。…ほら、ちょうど看板が見えてきたし。」
木野さんが指を指した先には小さな看板が建っている。
吹雪「やっ！と休憩所に着いたんだね…」

鬼道「そうだな…」

壁山「そろそろお昼ご飯の時間ッス…」

綱海「山登りを軽く見てたぜ…」

休憩所が目に見えてきた余裕か、皆の口数が増えてきた。

（又、中途半田でサーセンです；次話はこれを投稿した後直ぐに書くかと思っているので早めに投稿出来ると思います（↑殴）
（コピーして次話投稿してます；）

円堂「おお！！入り口だあっ！」

それまでくたくただった皆はその言葉で一気にペースを上げた。

不動「やっとかよ…」

立向居「そうですねっ！本当にやっ！とですよね」

虎丸「疲れたー」

豪炎寺「ふっ…まだ道のりは沢山あるぞ」

扉を開けるとそこは外側と違う古びた場所だった。

壁山「うわっ…！こ、ここ…本当に休憩所っすかぁ？…なんか怖いっす」

木野「う、うん…そのはず何だけど…酷い所だね」成る程そこは誰も想像がつかなかった光景が広がっていた。

まず暗い。今日は真夏の真っ昼間、なのに天井の穴から出てくるか細い光しか辺りを照らすものはなかった。

円堂「前が見えな…いッ!」(どんっ

基山「ええええ、円堂君ッ!」?

先ほどからゆっくり動いていた円堂君が俺にぶつかる。

円堂「ヒロト?…あ、ごめんッ!大丈夫か?!」

基山「うん、全然平気だよ^^」

それよりも円堂君の顔が近い。しかも本気で心配してくれているから余計GOODきている。

全員が休憩所に入った頃、急に天気が崩れだした。

吹雪「山の天気は変わりやすいって言うしね」

音無「ですねー、ってッ!天井の穴から雨が…!」

立向居「わ、わわわっ冷たっ!」

綱海「大丈夫か?立向居…ほら、こうすればお前にかからないだろ?」(がばっと、立向居に覆い被さる綱海。

立向居「っ、つつつ綱海さんっ!!!／／／」

基山「……!」

さりげなく俺は円堂君に目をやる。

円堂「うおおうっ!冷てえー」

基山「……!!!!!!」

来た…俺の…俺の時代が…き、た、…ッ!(ビッチ

基山「円堂く…!ぐおおえんじい君ッッッッッッッ!」?

見れば豪炎寺…いや豪園児君は綱立同様に円堂君に覆い被さっていた。

豪炎寺「ふっ……」(どやっ

基山「………ッ!!!!」

円堂「ヒロト、何か俺の事呼んだか?」

基山「え…いや、何でもないよぉー^^」
こういう風に昼と夕方を皆で過ごした。

P M…23時16分

急に円堂君がムクリと起き上がり、布団を抜け出していった。

基山「…？」

他の皆は今日の疲れかぐっすり眠っている。

ちなみに布団は古びた和室の中に（女子は別室）布団を敷き詰めて皆で寝ている。

俺は円堂君の行方を知りたかったので後をつけた。

どうやらトイレに行きたかったらしい。円堂君は小走り気味にトイレに続く長めの廊下を歩いていた。

そして円堂君がトイレに入ってから1分ぐらいが経ったとき、空がピカッと光る。「きゃあああああッ！！！！！！」

円堂君が入ったトイレから聞こえた悲鳴。

俺は咄嗟にドアをノックしまくっていた。

すると中から泣きそうな顔をした円堂君が飛び出してくる。

基山「ええ円堂君ッ！！！！！！／／／」

円堂「ヒロトおううっ！こ、怖い」

（3話終わりです；中途半田は香夜恒例の行事ですなww2話投稿してから書いてきたのに何このペースの遅さor駄作品さ：orz 申し訳ないです。）基山「え、あ、あああ…だだだ大丈夫、大丈夫だよ。円堂君／／／」

こんな顔をした円堂君を俺は一度も見ることがない。

しかも雷が嫌いだったとは…／／／

円堂「う、うう…」

するともう一度雷が鳴った。よく考えると山で雷が鳴るのは危険だ。

基山「ツッ!!!!!!? 円堂君ツッ!!!!??」

見ると円堂君は休憩所を飛び出しひたすらに走っていた。
俺は円堂君を追いかける。

基山「円堂君んーッ!! 動いたら余計危ないよッッ!!!!!!」
だがパニックった円堂君の耳には届いていないらしく更に山の奥へと
進んでいく。

それから追いついたのは10分ぐらい経ってからだった。
勿論その10分の間にも雷が鳴り続けていた。

基山「円堂君ッ!!!!!!」

円堂「——ツッ!!!!!!!!!! ヒロトッ! ご、ごめんッッ!!!!!! 俺
：雷鳴るとすげえ怖くなって：その場から逃げ出したくなるんだ：
っ!」

円堂君はやつと自分の行動に理解をし、後悔をして顔を歪める。

基山「いいよ：全然俺は大丈夫。それより円堂君：もっと大事な問題があるよ?」

円堂「……あ：あああッッ!!!!!!!! 帰れないッッ!!!!!!
ヒロトッッ!!!!!! ホントごめんッッ!!!!!!」

帰れない、それは結構大問題な事だ。

基山「うん、まあ俺は（円堂君が居るから）（心は）全然大丈夫な
んだけどね、：取り敢えず：そこら辺で止まるところ。丁度雨も止
んできたし。明るくなったら皆と会えるように休憩所の2に行っ
ておこうよ」

円堂「あ、ああ……」

ふと見てみると円堂君の顔に陰がさしていた。

不意に俺は円堂君に抱きついてしまう。

円堂「——ッ!!!!!! ヒロト……」

基山「円堂君は笑っていて：俺は円堂君の笑顔が好きだから。」正
直に、素直に気持ちを伝えた。

円堂「……ありがとう。ヒロト：嬉しい。俺も：お、おお俺も：ヒ
ロトが……す……すう……す、すすす」

先は聞かなくても良い。唇で言葉を、告白を遮った。

軽いキスだったのに円堂君は顔をリングのように赤く頬…いや、顔を染めていた。

つい俺はニコっとしてしまう。

そしてもう一度言った。

基山「円堂君、大好きです。」

翌朝の休憩所

（風丸視点）

朝起きたら円堂とヒロトが居なかった…。

今は朝の6時、昨日の疲れも取れて良い朝になると思っていたのにそれは慌ただしく俺を起こすマネージャー達によって崩れた。

木野「風丸君ッ！！起きてッ！！」

風丸「う…う…どうしたんだ？」

冬花「守くんとヒロトさんがいないんです…！」

円堂とヒロトが——居ない…！！！！？

風丸「どういう事だよっ！？円堂とヒロトがいないって…！！」

辺りを見渡す。やはり円堂とヒロトは居ない。

他の皆はぐっすりと眠っている。

木野「朝ね、私たちが起きて皆を起こしに行こうと思ったら円堂君とヒロト君が…風丸「居なかった…んだな？」

木野「うん…」

それにしても何故円堂とヒロトが…？

まさかヒロト…円堂を襲ったりして…

いや、それは無い…かな？ああ見えてもヒロトは変態と言う名の紳士さんだからな…。

すると起きていたけど全く存在感が無かった眼鏡が口を開いた。眼鏡「おほんっ！ええーと、昨日の夜の事ですけど…途中から雷と雨が酷くなっていました。」

風丸「それがどうしたんだ…？」

眼鏡「まあまあ…最後まで聞いてくださいよ。さっき円堂君とヒロト君の布団を調べたんですけどきつと僕が思うに、布団を出たのは深夜辺りです。」

風丸「ほ、本当か…ッ！！？…じゃあ二人は天候が悪い中、外を出たって事に…？」

眼鏡「…恐らく、そうでしょうね…。」

だとしたら危険だ。

ここは円堂の貞操よりも二人の安否の方が心配になった。

情報を集める為、次々に皆を起こしていく。

まず円堂の右隣に寝ていた豪炎寺に聞いてみた。

豪炎寺「…いや、残念だが…見ていない…」次は左隣にいた鬼道。

鬼道「何っ！？円堂とヒロトが…ッ！！？…すまない…雷が鳴っていたのは気付いていたが円堂が何処かに行ったのは分からなかった…。」

そして扉の近くに寝ている立向居…がいない…？

…いや、よく見ると立向居は隣にいる綱海の布団に潜りこんでいる。

立向居「円堂さんがッ！！？…あ、でも俺綱海さんの布団に入れてもらうときふとヒロトさんの方見たんですよ、その時はまだ居ましたよ。ついでに雷も鳴っていませんでした。」

風丸「じ、時間は分かるか…！」

立向居「はい、丁度目覚まし時計を見るときにヒロトさんが見えましたから。P.M. 22時30分ちよつきりでしたっ！」

風丸「あ、ありがとう。立向居ッ！！」

立向居「いえ、お役にたてたら嬉しいです。」

とにかく円堂が行きそうな所を探してくることにする。

夜出るぐらいの用事と言えば…トイレ…ぐらいか…？

(四話、終わりです。…今回は…いや、やっぱり今回も中途半田…)

＊＊ヒロトと円堂＊＊

基山「とにかく、何としても休憩所2に行かなきゃね」

円堂「あ、ああ…」

今は朝の6時30分。

あれから円堂君と俺は雷が止むまで木があまりない平地へ行った。雷が止むと途端に晴れてきた（と言っても辺りは真っ暗）ので近くに生えていた木に凭れて一晩を過ごした。（ちなみに時間は腕時計を着けているから分かる）

基山「…昨日のあれ…いけなかった？」

気になったので俺は聞いてみる。

円堂「へっ！？あ、いやッ！！そんな事ないぜッ！！た、ただ…あんな事したのに今日も普通な感じだったから…さ…ヒロト、こう言うのに慣れてるのかなって…考えちゃって…——ッ！！…ムググ」

慣れてなんかない、キスしたのだって円堂君が初めてだったし…それに、ほら…俺の鼓動は円堂君に反応し続けている。

そう伝える為にまた、キスをしていた。

円堂「ムグ——ふう…：…：ごめん、ヒロト。疑って悪かった…」
顔を染めつつも笑顔を崩さない円堂君。

基山「…うん！」

それから目印を見つける為に俺らは歩き出した。

暫く無言だった…が、円堂君は不意にポツリと呟いた。

円堂「雷をさ…俺は好きになれないな…。例えそれが俺の町のマークでも、勝利をもたらしてくれていても…無理…だな…」

基山「…そっか…俺は流星が嫌いかな？…」

円堂「…いつバレるのかなああー俺の怖いもの…」

基山「…バレるのが怖い？」

上を見上げる。

円堂「ああ…怖い。…失望されたりしたら嫌だからな…」

基山「失望なんかされないと思うけどなあ」

今日の円堂君には言っておきたい事がある。

円堂「…」

基山「チームの皆は仲間じゃなかったの？」

円堂「最高の仲間だ。」

基山「じゃあ：仲間にとっての君は最高の仲間じゃないとおもってる？」

円堂「…分かった。俺：ごめん：またヒロトに助けられたな」

基山「助けてなんかないよ、…それに：俺なんかいつも円堂君に助けられてるし」

君の笑顔と、言葉と、優しさと、勇気と：数えきれないものを沢山貰って：そして助けられてる。

円堂「…：ははっ」基山「ふふっ…」

つい笑ってしまう。

円堂「：それが、仲間：だよな」

基山「だねっ」

それから暫く無言になるがそれは心地よいものだった。

風丸視点

そう言えばずっと前に円堂が嫌いなもの言ってた気がする。

不意に俺は扉が開いたままのトイレの前に立ちながら昔の事を思い出していた。

円堂『俺さ：***が嫌いでさ、鳴ると何かその場から逃げ出したくなるんだ』

——？円堂は何が嫌いだっけ…？

***か、……り…。

かみなり…。

『俺さ：雷が嫌いでさ、鳴ると何かその場から逃げ出したくなるん

だ』

そうだった。円堂は雷が嫌いで……。

今更ながらに思い出した意味を理解した。

風丸「まさか：円堂がトイレに行った時ちょうど雷が鳴ったのか：？」

立向居が言ってたように22時30分は居た。時間を絞れば22時30分／＼朝：いや、眼鏡が出ていったのは深夜って言ってたから深夜の2時3時辺りか？

だとすると：今は5時ぐらいだから：そんなに遠くに行っていないかもだな。それにヒロトも居るし、こう言う時の常識ぐらい備わっているだろう。

俺だったら休憩所2に先回りしちゃうかな……？

風丸「うおッ！！？——っ土方っ！！？」

部屋に戻ろうと振り返ると土方がいた。

土方「風丸か！ってどうしたんだ？トイレの前でずっとじっとしてたけど」

風丸「……いや、何でもないよ」

円堂達の事を言おうかと思ったが面倒くさいのでやめた。どうせ後で知ることになるだろうし……。

そう思って部屋に戻ろうとしたが土方が後ろから呼び止めてきた。

土方「なあ、風丸。昨日の夜：俺、見たぞ？」

風丸「——っ！！？」

土方「円堂が出ていった後に基山が後追いかけてたからな：、気になって俺もついていったんだよ。……円堂のやつ、すごい悲鳴出して基山に抱きついてたな。俺は邪魔したらあれだと思って戻ったよ。」

やっぱりトイレに行ってる途中に雷が鳴ったのか……。

：どちらにしろ俺たちは次の目的地に行くのだが。

風丸「そう……か。」

土方「おう、じゃあな」

その後俺たちは次の目的地へと足を進めた。

ヒロト

円堂君にキスした。それだけで俺は死ぬぐらい嬉しいのに、まさかの両想い……。隣を見るとニコニコ笑って楽しそうにしている円堂君。

自然と俺も笑顔になれる。

円堂君が居るから俺はこんな時でも焦りを感じることも無く、むしろ気分は最高潮になるんだ。

基山「ねえ：ま、守？」

円堂「ん？何だ？ヒロト」

基山「ううん、何でもないよ」

数回繰り返した。

だが円堂君は全く気が付かなくて同じ言葉で返事をしてくる。

だがふと円堂君の顔を覗き込んだ時に気が付いた。

頬が赤く染まり、少しだけニヤけている事を。

（6話終わりです；）

休憩所は案外近くにあった。

歩くペースが速かったのもあるけど初日よりかはマシな距離だったし。

基山「守：体力大丈夫？すごい汗……はっ！！あ、あせ：／／／」

円堂「えっ！！？あ、大丈夫：だけど、何で近寄ってくんのっ？」

円堂君の汗ですら愛しく感じる……。

基山「守……（（ピーっ↑（自己規制）しようッ!!」

円堂「えッ!!? お：おいっ!!!!? 今はまだ休憩所に行かなきゃダメな時だろっ!!?」

——ん?

基山「今はまだ……?（（ニヤ」

円堂「ち、違うッ!! えとっ!!? 違うッ!!」

腕を曲げ、胸の前で必死にブンブン手を振り回している円堂君……。愛くるしい仕草満載だな……。

基山「じゃあ……稲妻町に帰ったら……サッカー↑しようね」

円堂「サッカーするのか? ……おうッ!! 帰ったらサッカーだなっ!!」

基山「絶対激しくしてみせるからね」

会話ばっかで全然歩いていないような気がするが実はもう休憩所に着いていたりする。

それからしばらく外で風丸君達が来るのを待ってる事にした。

風丸視点

歩いてから早くも3時間経過した。

壁山「しんどいッス……そろそろ休みましようっスう」

綱海「おいおい……さっき休んだばかりだろ」

木野「気持ちは分かるけどもうちょっとだから頑張ってっ!」

そう言っている木野はさほどしんどそうには見えない。

染岡「なあ風丸。本当に円堂ら先に行ってるのかよ?」

俺の後ろを吹雪と歩いていた染岡が声をかけてくる。

風丸「……確証はないさ。でも俺は円堂とヒロトを信じてる」

染岡は何か言おうとし、口を開けたが結局何も言わずに「そっか」とだけ言った。

不動「こっちが勝手に信じただけで会える確率はねえんじゃねーの？」

不動が会話に入る。

染岡「おいっ！！てめえ「ダメだよ染岡君ッ！！」

染岡が不動の言葉にキレ、殴りかろうとするのを吹雪が止める。

風丸「染岡止せ…、俺は気にしてない。」

豪炎寺「不動、だから俺たちは信じるんだろ？」

いつの間にか俺の隣に来ていた豪炎寺が薄く微笑みながら不動の問いに答える。

不動「ハッ…。まあそれがお前らか…。」

豪炎寺の答えに納得したのか不動は黙った。

それに染岡と吹雪も静かになり、休憩所を見つけるまで皆暫く黙ったままだった。

風丸「あ、え！！円堂ッ！！！！ヒロトッ！！！！」ちゃんと居た。

円堂「風丸ッ！！！！皆っ！！！！！！！！！！ごめんッ！！！！」

円堂は腰を直角に曲げて謝っている。

基山「俺もごめん」風丸「ほんと良かったあ…」

心の中で安堵のため息をつく。安心したところでふと円堂の貞そ

（ ）が気になってくる。

風丸「…なあ、円堂？」

なるべく自然に…。

円堂「ん？何だ？」

風丸「ヒロトに…犯されてないかッ！！？大丈夫かッ！！？」

——ってしまったああアアッ！！率直すぎるぜ俺っ！！！！！！思わず理性の方が切れてしまったな…；

これじゃあ鈍感な円堂だって…

円堂「オカサレル？なんだよ？ソレ…。」

…気付かない、かあ；

風丸「何でもない。忘れてくれ」

円堂「? : 分かった」

: 言っておくが俺は過保護なだけであって円堂が恋愛として好きとかじゃ無いんだからな?

それに俺は緑川が好きだし。

雑談や再会の喜びを交わしたあと木野が休憩所のピロティに皆を集めた。

木野「皆、今日は1日も休まないで行くことになったよ」

皆「えええッ!!?」

音無「予定よりすぐ早く着いちゃいましたから : とにかく頑張りますようっ!!」

皆の不満の声の中、円堂だけイキイキとしていた。

円堂「皆ッ!!!! 行こうぜっ!! 次は休憩所3だろ?? 楽勝だつてッ!!」

一拍の間があってから皆は円堂に釣られて皆「おおおおオッツツ!!!!!!」

円堂に続き休憩所をそそくさと出ていく皆。

ヒロトは何故か固まって動かない。

俺も動かない。

基山「...風丸君。俺に聞きたい事とかないの?」

風丸「山ほどあるけど今は一つだけ : 。」

チラッとこちらに向けるヒロトの顔はいつまで経っても凛々しく感じる。

休憩所を出ていった皆はまだ見えてるしあと少し時間を割いても大丈夫だろう。

基山「何かな?」

風丸「昨日 : 円堂に何かしたか?」

何回も言う。俺は過保護なだけだからな。

基山「キスしたよ」

躊躇いも顔の表情も無く答えるヒロトに少し面食らう。

風丸「……………そうか。……………」

基山「…うん。てかもう行こうよ」

風丸「ああ…。」

ヒロト

休憩所3に着いたのは夕方だった。

途中、円堂君のテンションが異常に上がって走ったりしたせいで皆ヘトヘトだ。

晩御飯も今日は大量に出た。

円堂「なあッ!!皆ッ!!連想ゲームしよーぜっ!!」

唐突に、それも食事中に円堂君は言った。

立向居「ああッ!!良いですねっ!!やってみましょうよッ!!」

まず円堂君の意見には逆らわない立向居が発言。

綱海「そーだなあ」

皆「おうツツツツ!!」

立向居と綱海に続き、皆の賛成の声があがった。

その日の夜は連想ゲームをしながら眠りについた。

(次回で最終話です;)

翌日

円堂「…——ロト:ヒロト、ヒロトッ!!」

目を覚ますと目の前に円堂君がいた。

基山「——ッ!!えっ?守ッ!!?」

周りの皆が寝ていたので声は控えたが、本当に凄く驚いている。

それに馬乗りで。馬乗りで、俺の上にいる円堂君。

円堂「シート!!」

指を唇に当てて行うその仕草は成る程、円堂君にももの凄んごく似合っていた。

基山「／／／」

無言で頷く俺。

円堂「ヒロト、ちょっと来てくれ」

馬乗り状態から俺を解放して立ち上がり、廊下に向かっていった。

基山「:...」

俺は疑問符を浮かべながらも円堂君に着いていく。

構造は休憩所2とよく似ている。

時刻は夜中の3時。

どこに行くのだろうか？と考えていると急に円堂君が止まった。

真後ろを歩いていた俺は必然的に円堂君の背中にぶつかる。

軽く謝ってから辺りを見渡すと周りは木だった。

とにかく周りは木。

すると円堂君がぼつりと呟くように話しかけてきた。

円堂「ヒロト:...あの時ちゃんと言えなかったから:...言う、けど...」

妙に歯切れが悪い円堂君。

基山「ん？何かな？」

円堂「ヒロト、俺...お前が...お前の事が...一番、だ.....大好きだっ」

世界が逆回転したのかと思うほど（嬉しい意味で）衝撃的だった。

心臓は五月蠅すぎるくらいバクバクいつている。

円堂君にキスしたときよりもドキドキしているかもしれない。

基山「は、ああ...っ」

深呼吸すらままならないとは...。

円堂「だ、ただ大丈夫か？」

俺の様子が変と気付いたのか円堂君は俺に近づく。

基山「円堂君っ！ち、近付かない方が良いよッ！！？」
今近付かれたら俺は絶対に自分を止めれない。

円堂「えッ！！？な、何で？ヒロト……あ……ごめん。」
――？

基山「え、円堂……君？」

円堂「ごめん……」

そう言った円堂君は帰り道を俺に言ってから走り去って行った。

基山「円堂君……ま、守ッッッ！！！！」

俺の叫びは虚しく辺りの木々達が吸い込んでしまった。

あれからどういう風に帰ってきたのか分からない。

ただ、円堂君に変な誤解を生んでしまったのを後悔してばかりで
頭が一杯だった。

基山「円堂君……」

無意識に名前を呟いてしまう。

今は朝の5時頃、俺は寝付けずに縁側に来ていた。

「円堂が、どうかしたのか？」

不意に後ろから聞こえたその声に俺は何とも間抜けな声を出してしま
った。

基山「うひゃっ！！………か、風丸君……」

風丸君は苦笑しつつももう一度さっきと同じ言葉を繰り返す。

風丸「円堂が……どうかしたのか？」

基山「………」

俺の表情を見て何か悟ったのか風丸君は言った。

風丸「……、円堂に勘違いか何かされたのか？」

凶星。

基山「…うん。ちょっとね…」

風丸君なら話せるような気がした。
だから話した。

風丸「あー…よくあるな、円堂のそう言うところ」

基山「そうなんだ…」

風丸「なあ、お前は円堂に何て言うんだ？」

基山「…………。ごめんって謝りたい。それから告白し直したい。」

風丸「……………だってさ、円堂。」

俺の隣に座っていた風丸君は後ろに振り向き、そう言った。

俺も釣られて後ろを振り向くと…

基山「え…？」

片手を後頭部に当て苦笑いをしている円堂君がいた。

円堂「ごめん…ヒロト…俺、勘違いが多い奴だからさ…ヒロトが俺の事、嫌いだったのかな…って…」

風丸君は何を思ったのか、そそくさと部屋に戻っていった。

基山「守…俺こそごめんね。誤解を招くようなセリフ吐いちゃって…」

円堂「いや、これは俺の早とちりだ。」

基山「ううん…守は何も悪くない。」

円堂「そんなことない、俺が悪いんだ。」

基山「俺が悪いんだよ。」

円堂「俺が…ハハハッ」

とうとう抑えきれなくなった円堂君、俺も抑えきれなくなって笑った。

基山「ハハハッ」

円堂君は俺の隣に来て座る。

円堂「ほんと面白いよ…」

円堂君の横顔は朝日に照らされ、凄く綺麗だ。

基山「綺麗だね…守。」

つい口にしてしまった。

円堂君は頬を染めつつもいつもの笑顔で

円堂「ありがと」

と、照れ臭そうに言った。

基山「好きだよ、守…。」

円堂「ああ。俺もだ、ヒロト…。」

自然と俺と円堂君の唇は重ね合っていた。

その光景は昇り行く太陽よりも綺麗だった…

……と、終われば良いのだがそこに思わぬ傍観者がいた。……、豪炎寺君

だった。

俺は円堂君とキスをしていたので横目に見たのだが…こちらをじいーっつと見つめてくる彼の目はどこぞの怨霊よりも恐ろしかった…。

あ…今日、光った…っ。

皆が起き、朝飯をしっかりと食べてから出発した。AM10…00頃だ。

もうすぐで着くという心の余裕か、皆は昨日と変わらず円堂君のテンションについていている。

勿論俺も論外ではない。

円堂「いっくぞーっ!!」

先程から何回も繰り返されている展開。

皆『うおおおおッッ!!!!!!』

先程から何回も繰り返される皆の反応。

そのたびに皆のペースは早くなる。

マネージャー達の体力も考え、気を使っているみたいなのだが氣を使われているマネージャー達はさほど疲れてはいないようだ。

それにしても初日に比べ、口数は増えてきた。

やはりこれも心の余裕からなのだろう。

なんて色々解説しているうちに宿泊所到大分近づいてきた。

吹雪「わぁ…きのこだよ、染岡君…!!」

染岡「うおっ!! 吹雪…きのこにあんま近付くなよ」

とあるカップルはのほほんと

立向居「つくなみさんっ!!」

綱海「立向居!! どうしたんだよ？」

立向居「えへへ」

…とあるカップルものほほんと

木暮「あッ!! 音無そこあぶねーぞッ!!」

音無「えっ!!? …あ、ありがとッ!! 木暮君っ」

鬼道「!! 春菜ああ俺は…俺はまだ許さんぞお」

…とあるカップルは昼ドラ展開へと

…やっぱりイナズマジャパンは面白いな…。

こうやって皆を観察するのも悪くないかもしれない。

そうこうしているうちにもう宿泊所は目の前だ。

円堂「やっ到着いたぞーッッ!!」

この一言で着いた、と言う実感が持てた。

木野「みんなあッ!! お疲れ様っ、早速昼ごはんにしましょっ」

壁山「うほっ☆お昼ご飯っスッ」

そこにはどでえーんと擬音を付けたくなるくらい迫力あるご飯があった。

何から何まで山盛り。

円堂「わあっ！！すっげえツツ！！」

食欲旺盛キャラの人は目をキラッキラさせ、そしてお馴染みのよだれ。

よだれ、食欲旺盛キャラの人、よだれ、食欲旺盛キャラⅡ円堂君、よだれ、円堂君の…よだれ…。

おっと、失礼…。

木野「じゃあ…いただきまーすっ！！」

皆「いただきまーすッ」

木野さんの号令(?)で皆は一気に食事モードに入る。

円堂君は俺の隣でガツガツとご飯を頬張っていた。

円堂「うはぁッ！！なぁヒロトッ！！これすげえ美味しいぜっ」

円堂君が指を指した先には唐揚げがあった。

基山「ん?…:(パク」

俺が返事を返す間も無く円堂君は俺の口へと唐揚げを入れた。

…成る程、こういうシチュエも良いな…じゃなくて唐揚げがかなり美味しい。

お袋の味とでも言うのだろうか?食べると何だか懐かしい気分になってくる。

円堂「どうだっ?美味しいだろ?」

ニカッと爽やかに笑うその笑顔に少々見とれた。

基山「／／／うん／／／」

お昼ご飯も食べ終わり、一気に緊張がとけた皆は殆んどの人が眠ってしまっていた。

俺もそのうちの一人だ。

席とかも決まっていなかったので俺は円堂君の隣で寝た。

誰もが羨ましがるとこの特等席…。

円堂君の寝顔が間近にある。理性が切れないように必死に目を閉じるけど聞こえてくる円堂君の吐息が俺の睡眠を妨げてしまう。

……そこにもう一人……いや二人眠れない人が居るようだった。何気に円堂君LOVEな鬼道君と……俺の宿敵、豪炎寺君だ。二人とも円堂君に近い位置で寝ているので多分俺と同じ理由で寝れないのだろう。

あ、豪炎寺君がこっち見た……。

豪炎寺「(べー)」

基山「……ん なっ……!!」

舌を出して挑発するその行為に啞然とする。

一方、鬼道君の方はあきらか言っている事が分かる口パクで一言。

鬼道「(ぼーか)」

そしてそっぽを向く。

そんな二人の行動の意味が分からない。

円堂君は寝返りをうち、一気に顔が近付く……。

基山「——ッ!!——」

息が止まりそうだった。

前にも円堂君の寝顔は何回か見ているのだがここまで近くで見たことが無い。

両想いだけあって更に意識してしまうせいでもあるのだろう。

見とれていたら直ぐに朝が来てしまった。

基山「え」

皆さん……どうやら早起きなようで……早朝の4時半のはずの今……皆は俺を見ていた。

——いや、まじで……。

だって……何か……皆……冷たい瞳でこっち見てる。

凍てつく闇の(視線の)冷たさを思い知った。

……よし……とりあえず状況を整理しよう。

守の状態…異常無し

俺の状態……………俺の状態……………お

い…おいおいおい…ッ！

俺はまだ円堂君に手を出した覚えはない。

簡単に描写しておくところだ…、俺が円堂君に絡み付いてる。

絡み付いてるのだ。

どう見ても俺から絡み付いたような状態。

自覚は全く無い。

なのに絡まっているって事は…無意識か？

などと考えてる間皆は俺を囲むようにして立っていた。

基山「ちょ…ッ！あ、いや…違うッ！…違うんだよ皆ッ！…！！！」

今更ながらに俺は円堂君から距離をとり、必死に弁解していた。

立向居「何が…違うんですか？」

飛鷹「何の言い訳してるんだ？」

顔から血の気が引いていく…。

しまった…墓穴を掘ってしまった…。

——と、そこでタイミング良く(?)円堂君が起きた。

円堂「んああ…え…何で皆ヒロト見てんの？」

伸びをし、上体を起こしてこっちを見る円堂君。

風丸「…なあ円堂。お前…ヒロトの事、どう思ってるんだ？」

俺は円堂君の目を見る。

目を泳がせつつ円堂君は言った。

円堂「……………ヒロトの事…俺はヒロトが…好きって思ってる」

その言葉で一気に視線が外れた。

正直何が言いたくて何をしたくて何を知りたくて皆が俺を見ていたのか分からない。…いや、皆が見ていたのは俺が円堂君に絡み付いていたからなのだろうがその後の風丸君の質問は少し理解に困った。

だが視線が外れたので気にしないことにする。

それに…円堂君は俺のことちゃんとみんなの前で好きって言うてく

れた。

——嬉しい／／／

戸を開ける音がしたので見てみると風丸君を先頭に皆は外に出ようとしていた。

風丸「円堂、ヒロト、俺ら朝ごはん食べに行ってくるからさっさと目を覚まして来いよ」

意図に気付く。

基山「分かった」

豪炎寺君も空気を読んだからか大人しく外に出ていった。

皆が出ていった後…重たい沈黙が流れる。

円堂「ヒ、ヒロト…」

布団の上で正座になり、心なしか縮こまっている円堂君。俺も雰囲気に乗せられて自分の布団の上で正座になる。

基山「な、ななな何かな？」

円堂「正式に俺と付き合ってくれッ！！！！！！／／／」（円ヒロサ
ーセン；）

二回…いや、三回も円堂君から告白されるなんて思ってもいなかった…ッ。

基山「うんッ！！／／／／／／」

元気一杯に返事をした。

気分が一気に高揚し、思わず抱きつく。

円堂「わッ！！………」

さっきとは違う沈黙が流れ…。

基山「そろそろ行こっか」

円堂君と俺は皆が待っているだろう食卓へと足を進めた。

(終わります。一応二人くっ付けたので W (C

【イナイレ】山で——8話（最終話）（後書き）

今までどうもありがとうございましたッ！！

この作品はぐだぐだ過ぎながらも完結致しましたッ！！見てくださった方（少ないかもですが）ありがとうございますッ！！御感想とかもいただけたらな…って、済みませんッ！！

最終話のくせに全員描写出来なかった…っ！！かなり心残りなんです…もう完結しましたしね…（^| ^;）でもちゃんと皆は居るんですッ！！！w

…はい、ごめんなさいでした。

ではもう一度、見てくださった方、ありがとうございますッ！！書いて楽しかったですッ！！

また私をどこかで見かけたときは宜しくお願いしますねw w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3546q/>

【イナイレ】山で——1話

2011年5月16日23時01分発行